青鞜

二月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青

鞜

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二月號目次

貞操に就ての雑感（感想）	一	野　　枝
冬のうた（短歌）	一一	齋賀琴
虎さん（小説）	一五	山田わか
年の暮（小説）	二九	加藤みどり
妬み（短歌）	四三	矢澤孝
ある男の夢（習作）	四八	岡田ゆき
お目に懸つた生田花世さんに就て	六六	原田皐月

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

野蜂の夢（飜譯）　八一　オリヴシュライ、ネル　山田わか譯

青鞜社詠草　九三　有田勢伊　よし子

一ぱいの湯の味（小說）　九七　牧野君江

ソニヤ・コヴァレフスキィの傳（飜譯）　一〇八　野上彌生子

小倉淸三郎氏に（感想）　一一九　らいてう

手紙　里見マツノ

編輯室より　野枝

表紙　奥村博

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

貞操に就いての雜感——野枝

在來の道德の中でも一番婦人を苦めたものは貞操であるらしい。

私は今迄かなり貞操と云ふことについては他人の考へを聞いたり敎へられたりしたけれど私自身のちやんとした貞操觀と云ふものは持たなかつた。私は本當にその事に就いてはさう考へるやうな事に今迄出會はなかつたし自分でも是非考へなければならないことであるとも思はなかつた。併し今迄他の人々の所謂貞操觀を聞く度びに多少の意見は持たないでもなかつた。

此度はしなく生田花世氏と安田皐月氏の論文によつて私は始めて本當に考へさゝれたけれどもそれとても矢張兩氏のお書きになつたものを土臺としての自分の考へでまだちやんとした貞操觀にはなつてゐない。

十日頃平塚氏と會つたときその話が出ていろ〳〵話して見てまた更に自分の考へを進めて見た。けれども結局本當に痛切な自分の問題にはならなかつた。そうして最後に私が從

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

來の貞操と云ふ言葉の內容に就いて考へ得たことは愛を中心にした男女の結合の間には貞操と云ふやうなものは不必要だと云ふこと丈けであつた。

在來の貞操と云ふ言葉の內容は「貞女兩夫に見えず」と云ふことだとすれば私はこんな不自然な道德は他にあるまいと思ふ。

かう云ふと又其處らでいろ〳〵うるさい理屈を云ふ人があるかもしれないけれど例へば此處に良人に死別れた婦人があるとして若しもその婦人が死んだ良人に對して何時迄も同じ愛が續いてゐてそれが動かすことの出來ない程力强いものであるならばそれはその婦人にとつては獨身でゐることは不自然でなく普通な事柄であると云はなければならない。然し多くの世間の寡婦達の間にはさう何時迄も寡婦でゐることを幸福だと思つてゐる人計りはない。貞操と云ふ道德觀念をその人達の頭から取り去つてしまつて欲するまゝに動かしたら屹度その人達がよろこんで相手をさがす事は必定である。またそれは決していけないことではないと私は思ふ。極めて自然な事柄である。

最も不都合な事は男子の貞操をとがめずに婦人のみをとがめる事である。これは最も婦人の人格を無視した道德であると思ふ。男子の再婚或は三婚四婚は何の問題にもならぬが婦人の相當の人達の再婚は直ぐと問題になる、これは何と云ふ不公平な事であらう。男子

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に貞操が無用ならば女子にも同じく無用でなくてはならない。女子に貞操が必要ならば同じく男子にも必要でなくてはならない。處がこの不公平な見解が一般の婦人達をして大變な誤まつた考へに導いた。

私はその誤まつた考へを生田氏によつて初めて知つたのだ。私は驚いた。けれどもそれは氏が世間一般の人達のその卑劣な考へに對して皮肉なあてつけを云つたのだと思つたけれどもあの論文をいよ／＼深く考へる程それが生田氏の本當の考へであることを知つた。私は私達の直ぐ傍にゐる人にさへさういふあやまつた考へが染みこんでゐることを悲しく思つた。それはかうである。

婦人が處女を保つと云ふことは最もよき結婚に一番必要な條件を保つことゝ同じだと云ふ事だ。今此處にあの生田氏のお書きになつたのがないから引照することは出來ないけれども確かにさうである。「いゝ幸福な結婚が出來ない」と云ふことが處女を失くした女の損失である。と生田氏は云つてゐられる。そうしてこの處女性に就いての生田氏の單純な考へが食べると云ふ目前に迫つた要求との爭鬪になつた。そうしていゝ結婚をあきらめさへすれば處女を失くしたつて構はないのだと云ふ考へが勝利を占めて遂に氏は處女を失くされた。併し女が處女を失くすると云ふことは例へそれが愛人に依つてであつてもなを多少

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の煩悶をしまた悲しみの情を感せずにはゐられない。併もそれが單パンとの交換問題とではどうしても及びつかないやうな氣がする。極く普通な境遇でさうだ。生田氏の境遇は本當に大變だつたらうと想ふ。私は喰べられなかつた經驗は矢張り生田氏同樣に持つてゐるどんなにそれが苦しいかは充分知つてゐるつもりだ。氏はまだ貧乏と云つても若干の收入があつてのことだ。私は無收入で苦しんだ。二ケ月も三ケ月も滿足に御飯にありつけなかつた事だつてある。けれどもどんな事があつても人間が餓死すると云ふことは生きやう食べやうと云ふことと以上に苦しい六ケしい忍耐の必要なことだと私は思ふ。乞食になつて物を貰つてたべたつてはづかしくはないと私は思ふ。たべる位はいろ〳〵なせいたくな心さいおこさなければ本當に窮迫のどん底まで落ちてしまへば却つて樂だと私は思ふ。生田氏は食べる事に苦勞したと云ふことを一種の誇にしてゐられるらしい。それは勿論隨分たべる苦勞も大變だがどんな尊いこともたべる事と交換が出來る程たべると云ふことが大切なことだとは思はない。生田氏は安田氏に向つて喰べる事に就いてはあなたより先輩だ、あなたはお膳立のとゝのつた前にばかり座つてゐらしつた。私は自分でお膳立したと云つて眞先にそれを楯にされたが私から見れば氏はまだ三度々々お米の御飯をたべておかずがなくては生きられないと思つてお出になるやうだ。ひもじい思ひをしては生きられないと思

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つてお出になるらしい。氏は自分丈けでなく弟がゐる。と云つてお出になる。併しそれが三つや四つの子供ではないのだから一通りの理屈は分る筈だと私は思ふ。

氏が本當に自分の處女と云ふものを大切にしようとなされればまだそうたべると云ふこと位ひに動かさずに濟んだのだと思ふ。けれども氏は婦人の處女を保つと云ふことの意義を單なる利益問題にしてしまはれた。其處に氏の考への落ち度があると私は思ふ。そしてこの考へは日本婦人の大半にさう云ふ間違つた考へを持たした。

氏は又處女を失くした事は自分の永久のかなしみだと云つてゐられる。それはそうあるべきである。そうしてそのかなしみは吉原や千束町の暗い家にゐる女達の持つてゐるのとおなじかなしみだと云つてゐられる、如何にも、氏のゆきかたとさう云ふ女たちのゆきかたは同じだ。彼女達もまたいゝ結婚をあきらめてパンと處女を交換した。氏もさうだ。氏の彼女等に對する同情の涙は氏自身への涙である。私は氏のその涙をけなしもしない笑ひもしない。私は眞實にいたましく思ふ。けれども氏のその苦しい涙はむしろより安價に買ふことが出來たのだ。氏がわづかな餓さえ堪へられたらその苦がい盃はのまずとも濟まされたであらう。無教育な唯たべることや着ることより他に何物も持たない彼の吉原や千束町の女たちならまだ仕方がないけれども兎に角一と通り物もよみ、書き、道理も解る方が何

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

故もう少し考られなかつたかと私は遺憾に思ふ。自分には良人が有からもう再びそん事なはないと氏は云つてゐられる。併し氏が「あの頃はまだ誰も自分の貞操を所有してゐた人はなかつたから」と云つた樣なことを云はれたことから見れば全然ないとも云へない。其の頃は夫も戀人もなくて他にさう云ふことをしても濟まないなど思ふ人はなかつた。併し今は良人がゐるから良人に對して出來ないと云つてお出になる。それは普通の理屈だ。良人があつて愛人が食べるに困るからと身を賣る女が何處にあらう。併し何ういふ事情で夫からまた愛人から去らうも知れぬ。その時はまた所有主がないから食べるに困つて同樣なことをするだらうと云ふ理屈の成り立つことに氏はお氣がつかないのであらうか。氏のことについてはこの位で止める。以上私の述べたことは私自身の思想感情によつてのことである。だから私はこれが絕對の眞理であるとは云ひかねる。何故なら私は先づ何故に處女と云ふものがそんなに貴いのだと問はるれぱその理由を答へることは出來ない。それは殆んど本能的に犯すべからざるものだと云ふ風に考へさゝれるからと答へるより他はない。だから私は私のこの理屈なしの事實をすべての人に無理にあてはめるわけにはゆかない。勿論つければいろ〳〵な理屈もつくが無理にさう云ふ表面的な理屈をつけた處で根本的な道理が解らなければ矢張り駄目である。で私の考へは以上の通りとして又他にかう云ふ事

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も考へ得られる。處女とか貞操とか云ふことを全で無視する事である。さういふ事もないとは限られぬ。またそれが惡くも何ともない事だと云ふことも考へ得られる。若し生田氏がさう云ふ態度ではじめから無視してかゝられたのならそれは又問題は自から別になるわけである。さうして私は最早生田氏のその態度について云ふべき何物も持たない。然を云へば私はあゝ云ふ弱い態度よりもかうした確信のある態度でゐて貰ひたかつた。氏は貞操を超越しやうと思つたと云つてゐられるけれど決して超越したのではなくて余儀なくさせられたのである。それもあく迄結婚をあきらめたと云ふ範圍を出でないで――である。獨身生活をしやうと決心したとは云ふものゝそれはあやふやな決心である。さう決心でもしなければ處女を捨てた云ひ譯けが自分に對してたゝなかつたからである。それは決心でも何でもない。自分に對するはかない慰さめであつた。氏はただ徹頭徹尾女性の弱さを失はなかつた。らいてう氏が生田氏のあの論文を讀んで男子に同感され同情されさうな文章だと評されたのは尤もだと思ふ。男性を引きつくる女性の弱々しさが遺憾なくその根本の思想に表はされてゐる。氏は何處までも從來のたをやかな弱々しい涙をたゝへた婦人である。親の爲めに身を賣る婦人である。氏が單獨で男子と同じ社會の表面に立つて自活の生活に堪えられなかつたのは尤もである。さうしてあゝした事になつたのも氏としてはすべてが

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自然であるには相違ない。

私がもしあの場合處女を犧牲にしてパンを得ると假定したならば私は寧ろ未練なく自分からヴァージニテイを逐ひ出してしまふ。そうして私はもつと他の方面に自分を育てるだらうと思ふ。私はそれが決して耻づべき行爲でないことを知つてゐる。現在結婚しつゝある、又、した、これからしやうとする男子のうちに眞に結婚する迄純潔を保つてゐる人が幾人あるかと云ふことを考へて見ると私はそれにくらべて女子のしをらしさをおもふと腹立たしくなる。彼等にはさう婦人の貞操を云々と云へる資格のある人はない筈である。彼等はその事を全で當然のことのやうな顏をしてゐる。そして却つて婦人の節操については往々甚だしい矛盾した侮辱が加へられる。

私はそれをいゝ事だとは勿論思はないけれども傲慢な彼等の前に弱々しい涙のみを見せてゐないで強い態度を見せ得る人もあつて惡くはないと思ふ。寧ろ自分の行爲に強い確信と是認の閃めきを見せる壯烈な女を見たいと思ふ。そして一方に處女を失ふと云ふことについても前に述べたやうな單純な誤まつた考へを打破することは必要である。そんな誤まつた考への爲めに捨てなくてもいゝものを捨てる女がどの位ゐるか知れないと思ふ、前に云つたやうに生田氏の吉原や千束町の女たちと同じ悲哀だと云ふやうな事を云つて自分を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

慰さめてゐる間は何時までたつてもその日陰の女たちを明るみへ出す日はない。それ等の女たちと同じだと自分で叫べる程に徹底する事の出來る氏が何故處女を捨てゝは結婚が出來ないかと迄考へをお進めにならなかつたことを私は殘念に思ふ。

私は先きに處女を大切なものだと云つた。けれどもそれは萬人にあてはまる眞理ではないと云つた。併し最近に私の聞いた處に依ると女が一度男子と接觸すれば血球に變化が起つて最早その婦人の純粹のものではなくなつてしまふ。だから此度他の男子との接觸の場合ひには矢張りその女の血球は第一の男によつて影響せられた上に又第二の男の影響を受けるので若し第二の男との間に子供が出來るとしてもその子供は純粹な第二の男と女との子ではなく幾干か第一の男の影響がある。と云ふ理屈がある。そう聞けば處女を許すと云ふことも余程きびしい理由が付くがまた他の人に聞くとそれはまだ俄かに信ぜられない事だと云ふ。それは千人が萬人のうちには左樣な例がないとも限らないが併しその僅かな例を持つて直ぐにそれが動かすことの出來ない眞理だとは考へられないとその人は云ふ。それも左樣らしく思はれる。何しろ何故處女を犯されると云ふことがそんなに女にとつて大事であるかと云ふ理由は私にもはつきりとはわからない。私は左樣な道理をさがす程にまだ熱心にはならなかつた。だから私は處女を失くしたものがいゝ結婚の出來ないと云ふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

理由は屹度ないだらうと思はれる。たゞその事だけが結婚の最も必要な條件であるとは云はれまいと思ふ。云ふ迄もなくそれは結婚しやうとする男女兩人の愛の如何に依つて定まるのである。若しその結婚しやうとする婦人 處女が既でに犯されてゐると云ふことが相手の男子をして惱ます場合は仕方がないとして若しも男子がそのことを是認しさへすれば何でもなくいゝ結婚が出來る譯けである。現に生田氏はさうして幸福な結婚をなすつたではないか。私は女が處女を失くしたからと云つて必ず幸福な結婚の出來ないと云ふ理由はないと考へる。何故もつと婦人達は强くなれないのだらう。もう一つ例を擧げれば正直な人たちはさうして處女を失つたことを涙と共に告白してかなしい獨身生活とか云ふあきらめの陰にかくれてゐる。けれども不正直な所謂悧巧な人達は處女を失つたと云ふこと等は知らぬ顏で立派な結婚をして幸福らしく暮してゐる。私のわづかな知人の間にすらそう云ふ悧巧な人達はどの位あるかしれない。そう云ふ人達よりはまだ正直な人々の方がどの位尊敬する價値があるかしれない。不正直な女、傲慢な男にはいくら幸福らしく見えても眞に幸福な結婚は六ケしい。たゞ正直な眞實な心を失はない女とその價値を認むることの出來る男とは幸福な結婚が出來る。生田氏もまたその幸福な結婚をなすつた一人だ。なぜ氏はあんな弱々しい涙のかはりに虚僞な貞操觀の下に屈從せずに堂々と失はれたものよりも

更に自分を幸福にした自分の誇りで安田氏におむかひにならなかつたらう。更に私は思ふ。世間の寡婦たちがつまらない貞操觀に囚はれて味氣ないさびしい空虛な日を送りながら果敢ない習俗的な道德心にわづかになぐさめられてゐる氣の毒さを――。何と云ふみぢめな事であらう。

あゝ、習俗打破！　習俗打破！　それより他には私達のすくはれる途はない。呪ひ封じ込まれたるいたましい婦人の生活よ！　私達は何時までも何時迄もぢつと耐へてはゐられない。やがて――、やがて――。

（四、一、一八、）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

冬のうた―齋賀琴

あざやかに白き野菊の咲き揃ふ山ぢを深みひとりゆくかも

入湯赤く渚のあなた松原に白堊の屋根の一つ光れり

冬の夜はしみ／＼とゐて酒を酌みたのしくひとりあすを夢みむ

とつぎける友がかなしきたよりだにやう／＼たえて冬となりけり

世の中を凡て我家に似しものと思ひしころのふところひしかり

自らを嘲ける外に自らをなぐさめがたきおのれなるかも

酒倉のましろき壁にてりはゆる赤き夕陽に泣かまほしけれ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夕來れば濃紫にくれて行く山にさびし旅のこゝろに
みる限り白き薄の波立ちて行手もわからぬ山腹のみち
ふるさとは南天の實の赤くして冬更けぬらむなき姉の家
天地にすみかももたぬ放浪の子にいたましや冬の風ふく
ちやるめらの笛のかなしさすてて來しふるさとだにも偲ばるるかな
何氣なく笑ひさゞめき送る日の度重なれる身とぞなりしか
玲瓏と水の如くにすみわたる旅のこゝろぞたうとかりける

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが庭の小さきばらなどぼたんなどつつましやかに冬にそなへぬ

金魚金魚のどかになれば泳ぐかなさゆらぎあらぬ小池の水に

山上をとび行く鳥よなれもまた白日を追ひかけりゆくかや

かりそめのあやまち事とおほさかに見給へるこそかなしかりけれ

ゆく雲よ山のあなたに住む人になれを戀ひつつしぬとつけてよ

天災のとく來れかしと待ちあれば世に何事のおどろきもなし

白き齒のしだいに蝕まれ行く如く害はれたるわが心かも

過ぎし日の美しかりし思ひ出に虐げられてしぬるこの身か

久しぶりにすへる煙草のうすあほき烟に心さびしめるかな

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

虎さん

——山田わか

私は姉を誘つて久しぶりに、田舍の父母を訪ねた。車に搖られながら通る道は低い雜木山の間を曲りくねつてゐた。小春日和のうらゝかな日光をあびて睡つて居るやうな、そして與へられたものを足りても足りなくても食つて生きて行くと云ふやうな此の土地の意氣地ない樣子は私の子供の時分と少しも變りがなかつた。父の家に着いて母のめつきり薄くなつた生際や父のたつた一本殘つた前齒を見ながら里芋の煮ころがしで晩飯を食べた。

『脊戸へ出て田を見て來な。今年やなか〳〵よく出來て、綺麗にあかるんでるよ。』顏中を皺にして嬉しそうに笑ひながら云ふ父の言葉に姉妹は立ち上がつた。

高く青く晴れた空の下に此處も低い紅葉まじりの雜木山にぐるり取り卷かれた一耕地はサラ〳〵と金色の小浪を打つて居た。私は田甫に下りて其の一穗を幹についたまゝ掌に載せた。そしてむつちりと美しく實つた其の米の一粒々々にこもる天然の力を恍惚さして思ふて居た。不圖稻の中から飛び出した赤蜻蛉の跡を逐ふて顏を上げた私の目に、耕地の向

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ふの、杉や竹の生ひ繁る中の、寺が入つた。平生、しんかんとして滅多に人の姿なぞを見ない筈の境内がしきりに、ざわついて居る事や又種々の飾り付けらしい色物を見て私は今日其處に十夜がある事を知つた。物ずきな私は姉をすゝめて其の寺へ行つて見やうとした。

『五月蠅(うるさ)いでせう。いろんな知つた人が居て。』

姉は額に八をよせて云つた。

『でも、どんな氣持ちがするか十何年かぶりであゝ云ふ處へ行つて見るのも一興よ。』

寺の外竈から青空に向つて眞直ぐに立ち登る煙を見ながら二人はブラ〳〵其の寺へ近づいて行つた。門口から本堂の表の階段の下迄屋台店が並んで居たが見ると其の屋台店の持主の顔は皆見覺えがあつた。彼等は珍しいと云ふやうに姉妹をジロ〳〵見て居た。恐らくは腹の中で『二本棒たらして、赤ッ毛をふりたてゝ五厘一錢と飴や、おでんを買つて嬉しがつて居た娘共が、今はあんな金縁の眼鏡なんかかけこんで眞面目くさつた顔してる』なぞと思つて居るだろうと思ひながら私は又私で、十年たつても十五年過ぎても恐らくは彼等の命のある限りは貧しい村の子供等の小使錢をあてにさもしい生活を續けなければならぬ彼等の運命を憐んだ。と同時に今彼等に言葉をかけるのも變、それだけの親しみはないのだから、と云つて知らん顔して居るのもなんだか調子が惡い、が其處から引き返すのも猶更

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おかしい、當惑した心持ちになつたが、とにかく、あらぬ方に目を向けて通り過ぎて見やうとした。此の時、前列の屋台店からは引きこんだ處にかん酒の釜の下をバタ〳〵扇いで居る色の青黒い穢しい男が目に止まつて、よく見ると其は私の小學校友達で八さんと云ふ程の遠縁のものであつた。肉の張りきつた血色のいゝ二十歳前後の八さんを覺えて居た私は自分と同年輩の人の此の變り果てた姿を見て、丁度人生の秋に立つた痛ましい自分の姿を見せつけられたやうに胸がつぶれた。

立ち止まつて二言三言、ものを云ひかはして居ると汚ない子供等が二十人計り、ゾロ〳〵私のまわりへ集まつて來た。眺め廻して見ると其の中に八さんの伜を寫した顏が五ッ程あつた。

『あら、此の子も、此の子も、それからあの子も、あなたのお顏ですね。まア、いゝお子持ち。』

『ゑゝ食やあがつて〳〵仕樣がなへでさ。』

返事に困つた私はいきなり八さんの顏を持つて居る一人の子供を捕へて

『今日は此のおばさんが十夜のお小遣を上げやうね。』

蝦蟇口を開けて居ると其處へ八さんの女房(かゝあ)さんが手桶に水を一杯下げて來た。彼女は鬢(びん)に

少しのふくらみもない、髻の劣つた、赤い玉の根掛のいやに目立つ丸髷を幾度も〳〵下げて私に禮を云つた。

此の少し前から本堂の中では盛んに鐘と太鼓がなり出して居た。這入つて見ると村の人達が殆んど本堂を滿して、村で聲自慢の人の歌念佛を聞いて居た。其の歌の切れ目々々に彼等の打ちたゝく鐘と太鼓の音は本堂の隅々迄も充滿して人の話聲なぞは全く呑んでしまつて居た。本尊樣の前にうづ高く積み上げた秋の果物や又造花なぞのまはりを中坊主がチョコ〳〵して、さも重要な役目でもして居るやうな顏して、忙しそうに蠟燭の心を切つたりなぞして居た。此を見、此を聞いた私の頭からは、日頃私を逐ひかけ、せめかけして居る、時間と云ふものが全く消へてしまつて、私は何百年か昔へ引きもどされたやうな、のんびりしたやうな、けれども不安のやうな妙な心持ちになつた。今日一日野良仕事を休んで此の單純な調子の鐘と太鼓の音に充分心を樂しませて居る村人達の生活をしみ〴〵味つたやうな氣もして私はぼんやり立ち盡して居たが、イラ〳〵した姉の表情に引き立てられて寺の門の外に出た。變り易い秋の空はいつか、かき雲つて冷い風が寺の森や雜木山をがさつかせて居た。

『おゝ寒くなつた。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と不平らしく云ふ姉の顔に

『あなたも隨分物ずきよ。あんな汚ない子供等にお金をやつたり、あんな處へ落ち付きはらつたり、つき合つてる私こそ、いゝ迷惑だ。』

と云ふ意味を私は讀んだ。思ふ事をみんな口へ出さないのが姉の性分である。二人はもと來た道を別ゝな事を考へながら歩いて居ると突然後から

『どうもおまへさんのやうだと思つてましたら、やつぱりおまへさんだつた。よくまア御出でなさへました。何時へ?。』

しやがれた老婆の聲に私は振り返つた。それは草籠を脊負ふた、澁紙をはつたやうな顏色した老婆であつたが此の人の顏を見ると同時に私の心に此の人の一人息子の虎さんがうつツた。

* * * * *

『其の日稼ぎの天秤棒かつぎのくせにと、且那衆の娘さんと生れた、あんたは思ひなさるだろう。だけんど〳〵〳〵。』

其の時々の野菜を天秤棒の擔ふ程、籠にあり上げて町へ賣りに行くのが虎さんの商賣であつた。彼は私に戀文を送つて見たり、近所の女房(かみ)さんを頼んで見たり、憂身をやつして口

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

說いても何の感じもないやうな私に向つてこう云つて泣いて歎いた。私に戀と云ふ言葉を私語いたのは此の男が始めてゞあつた。けれど未だ肩揚のふかい、鷹揚に育つた私には其の戀と云ふ言葉の意味はまるで謎のやうなものであつた。どうしても私に解されない虎さんは其れぎり私に自分の姿を見せなくなつた。

以來十數年の間此の虎さんの眉毛の濃い引きしまつた顏は時々私の夢に現れた來た。私が兩親の膝下を離れた後世間からは誤解され、しいたげられ、親兄弟からも全く離れて居る時にも夢の虎さんは私を信じ、私を勞り、私の前に膝まづいて忠實な奴隷のやうに私にかしづいて呉れた。其れを私は一言も人にはもらさず、世にも稀な寶を所有して居るやうな誇らかな心持ちで胸の奥に秘めて置いた。と同時に魂を自分に奪はれてしまつた、もぬけの殼の虎さんを良人と賴んで居る、其の後虎さんの持つた女房を私は氣の毒な憐れな女だと思つて居た。

* * * * * *

振り向いてしんみり、ものを云ひ始めた妹を又かと云ふやうな顏して姉は横目で見て居た。

『皆さんはお丈夫ですか?。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こう私が云ふと老婆の顔は急に雲つた。醤油で煮染たやうな色の手拭を頭から取りながら

『丈夫どころかおまへさん。』

こう云つて彼女は其の手拭で、大浪になつた皺の間に潛つて居るやうな小さい目をふいた。

『去年の暮に父親が死にますし、そればつかりかあの虎も！………。』

老婆はわッと泣き出した。

『ゑッ、虎さんがどうなさいました。』

『虎も死にましたい――、ろゝ六人の子を置いて。』

腹の底からしぼり出したやうな聲で云つたかと思ふと後は體をゆすつて泣くのであつた。

私は何かしらドキリと胸を打たれて、目に涙一杯にじみ出て來た。けれど、胸を打たれたのは虎さんの死だが涙は良人や一人子に取り殘されたみじめな老婆のためであつた。もとより私の夢のうちに重に生きて居る虎さんの肉體が此の世から消へたからと云ふて其れは私の涙を誘ふやうな事件ではなかつた。

『虎は三日計りわづらへましたけれど親父の方は誠にあッけないもので御座へました。』

やうやく涙を納めて老婆は話しだした。

『餅搗きの晩父親は搗きたての餅を喉へひッかけて往生したので御座へますが後で聞きま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

したら、そうぢや御座へませんとよ。』
『後で御聞きになつたとはどなたにですか?。』
『巫女に見て貰へましたら父親が自分で出て來てそう申ましたよ。』
『へゑ。』
と云つて私は老母の迷信をいくらか冷笑するやうな心持ちになつたが直ぐ「待て〳〵此の人が巫女を通して他界の人と交通してせめてもの慰めにして居るのも私が虎さんの心を信じて獨り嬉しがつて居るのもつまり同じことではないか」と思つた。
『父親が申まするに、餅を食ふちッと前から疝氣がをこッて居たそうで御座へますよ。それを私等は少しも氣が付かなへでしたがね。疝氣がをこッて居るところへ餅が喉へひッかゝッたからたまらなかッたので御座へますとよ。』
『成程。』
涙まじりの老母の話に受けこたへはして居るものゝ私の心は全く虎さんの上に逍遙つて居た。
商ひに行つた其のまゝの、めくらじまの股引に同じ仕事衣を着た姿で人通りの少い裏道に、お針の稽古から歸つて來る私をよく虎さんは待つて居たものであつた。言葉をかけら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れてニッコリする私を虎さんは恨めしさうに見詰めて居た。あらい縞の手織木綿の着物に、赤地に白い燕を染めぬいた帶が私によく似合ふと云つて居たこともあつた。無心にニコ〳〵する初々しさが、つらの憎い程可愛いと、近所の女房さんに云つたと、其の女房さんが私に云つて聞かせたりした。うちに忙しい事があつて四五日もお針の稽古を休むと虎さんは夜ふける迄うちのまわりをうろ〳〵して居たらしかつた。或る晩遅く町から歸つて來た私の兄がもう寐入つて居る私を、低いけれども力のこもつた聲でしきりに呼びさました。私は目をさました。そして何事が起つたかと思つてびツくりした。兄は嚴格な態度で私の枕もとへ坐りこんで私にも坐れと云つた。私は怪訝な顏して云はれる通りにした。それを待つて兄は徐に口を開いた。

『己が今門から這入つて來ると月あかりをよけた、うす暗い處にしやがんで居る奴があるから此奴曲者と、ひツ捕まへて見ると、それやあの野菜擔ぎの虎だツたよ。惡い了見で此處に居たわけぢやないからツて平あやまりにあやまるから、己も彼奴が物取りをするやうな奴でないのを知つて居るから、はなしてはやツたが彼奴が何のために此の夜ふけにあんな處に居たとお前は思ふ。下女でも居るなら下女をからかいに來たと思はれるが、今此の村では、奉公人は皆やどりに行つて居る事は誰でも知つて居る事だから、さうでないのは

確かだ。して見るとお前をどうかしやうとして居るのだ。いゝか、己が今お前に云ふ事をようく覺えて居て與れ。己はお前がお父さんやお母さんや、又己の目を忍んで事をするやうな子だとはどうしても思はないが念のために云つて置くのだ。いゝか、先祖代々淸くつゞいて來た此の家の血統をどうぞ汚して與れるなよ。もしお前が不義を働いたならお前と云ふ人間を此の家から取り除かなければならないが、併し其れで事がすむと思ふと違ふぞよ。先祖代々の名の汚れになるのだから、ようく其處のところを覺えて居て必ず惡い奴にだまされちやならないぞ。いゝか分つたか?。』

私は兄の云ふ事は皆もッともだと思つた

『えゝ、ほんとうにそうです。私、兄さんの云ふ事は皆よく分ります。』

とさへ〳〵と云つた。兄は非常に滿足して

『お前は本當に己の妹だ。』

と云つて譽めて與れた。私は兄に譽められたのが嬉しくて、其の晩の虎さんの苦悶なぞを考へる暇は心になかつた。けれども惡い奴と兄が云つた言葉は少しおかしいと思つた。若い男が若い娘に惚れたつて、それで惡い奴と定めるのは、どうも腑に落ちなかッた。けれども兄の云ふ事は一々本當だし、どッちがどうだか實は分けが分からなかつた。が兎に角

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く人の目を忍ぶと云ふ事はどうしても惡い事だ。こう思つて其れには直ぐ解決がついて心に殘る何の煩ひもなく其の晩はそれで睡つてしまッた。

あゝ氣の毒な虎さん。どんな思ひをいだいて此の世に別れを告げたろう？　もしあの時分に虎さんのうちと私のうちが同格の家柄であつたなら虎さんはあんなにも苦勞をせずに堂々と結婚を申込んで來たのであつたろうに、自分の身分を卑下してかげで計りこそ〳〵と苦しんで居たのだ。或ひは又私がもう少し年をとッて居て男の切ない思ひを解する事が出來たらどうだろう。私は自分の周圍の全部を排して虎さんについたかもしれない。もし、そうだッたら此の老母は私の姑になるのだつた。そして一所に草籠を背負ふたかも知れない。勿論それも辭さない處である。が幸か不幸か私が虎さんの心のうちを思ひやるやうになつたのは私の身の上にも幾多の變動があり、虎さんにも子供迄出來た後であつた。あゝせめて一度でもしんみり優しい言葉をかけてやりたかッた。慰めてやりたかつた。定めし淋びしい空虛な生涯であつたろう。私は知らず〳〵人一人の生涯をむざ〳〵と破壞してしまつた。心に漲る滿足があつたなら、こんな早死をしなかつたかも知れない。あゝ、濟まない事をした。…………が濟まないのは虎さんに對して計りではない。生先き短い此の老母が今此の大きな歎を見るのもやッぱりもとは自分から起つた事ではないか。あゝ老母計

りではない。稼ぎ人の父を失つた幼い子供等は、其の子供等を抱へた母親は………ああ、どうしやう〳〵〳〵。私の腹の中は掻きむしられるやうだ。

老婆はくど〳〵と、私の心のうちは知るや知らずや、虎さんのわづらッた時の様子や十三になる總領の男の子が町へ野菜を賣りに行つて生活(くらし)の足(たし)にする事や、嫁が乳飲兒を抱えて途方にくれて居る事や種々難義な事をこぼしてから

『おかへさんは此の汚(きた)ないばゞアの愚痴を、しみ〴〵聞いてお呉んなはるから私や嬉しう御座へます。』

こう云つて又醬油で煮染めたやうな手拭を目にあてた。其の手は松の木の皮のやうにあれて居た。姉は體を行くてに向けて迷惑そうな寒そうな横顏を二人の方に見せてた居た。

みちすがら、私はどうぞして、老母の一家に幾分の慰安を與へ、あはせて、虎さんの靈をも慰めたいと思ひあせッた。

『實に氣の毒だ!。』

溜息と一所に思はず口ばしッた私の顏を姉は不思議そうに眺めた。そして

『子に先だゝれる親、夫に死別れる妻、親に取りのこされる子、そんな事は、世間、ざらにある事柄だのに、なんで妹はあんなに考へ込んで居るのだろう。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と思つて居るらしかつた。

二人が父の家へ歸つた時にはうす暗いランプがすゝけた十疊間をぼんやり輝して居た。姉妹のために出してあつた客火鉢にがぶさるやうに兩手を翳して私は坐つた。姉は其の向ふへ、つゝましやかに膝を折つて帶の間から煙草入を出した。そして云つた。

『あなたはどうしてあのお婆さんと懇意なの。』

『別に懇意ぢやないんですが可哀想な身の上だと思つて唯話相手になつてやつたゞけです。』

『それにしては、ちと、しんみりし過ぎてゐましたね。』

『そうかしら。』

と云つてしばらく考へた後私は云つた。

『虎さんはもう此の世に居ないから云ひますがね…………實は…………其の時分には私が未だ、まるツきり子供で分らなかツたんですが、後から考へて見ると、あの人は餘程私を大騷ぎして居たらしいんですよ。』

『アラ厭だ。あの男が？　あなたにも何にか云ひかけたの？。』

私は目を圓くして姉の顏を見詰めた。

『私をさんだ〴〵困らしたんですよ、あの人は。』

『えッ！。』

『其の後で又妹のあなたを口說いて見るなんて隨分彼奴は耻知らずだつたのね。』

姉は憤慨した。

其の後虎さんは私の夢に現れて來なかつた。（終り）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

年の暮

加藤みどり

芳子は此の頃頻りと務めて居た頃の事を思ひ出される。勝手もとで働いて居る時でも、又新聞や雜誌を讀むで居る時でも、不圖新聞社へ出て居た時の自分の姿を目に浮べて其の頃の氣分が堪らず戀しい。

良人のある、子供のある身と云ふ事は全く忘れて、毎日多くの男の中に唯女一人男と同じ樣に働いて居た事を思ふと、斯うして迫つて來た年の暮を氣にしながら家庭の中にぐづぐづと暮して行く今の自分と思ひ比べるとどうも不思議な氣がする。袴をつけて靴を穿いた勢よく婆やや小供に送られて毎日出て行つた事や、電車や人力車に飛び乘つてどのやうな立派な家へも名刺一枚で奥迄通された事。そうして騷々しい編輯室の空氣——事件のある時の緊張した氣分——殊に目に浮ぶのは事につけての人々の振舞や言葉であつた。生活に於ての多少の安心と社會の位置に對する自信——さうしたものが至つて沈鬱な芳子の心をも引き立てて快活にして居た。それを思ふと芳子は、又しても今の境遇を顧られる、然

し芳子はさうした過去の生活の中にも言葉にも筆にも現せない苦痛のあつた事を思ふとまんざら今の生活を口惜むわけにも行かない。所詮はどう轉むでも起きても定められた運命から逃れる事は出來ないと斷念めても見る。

芳子は自分の今迄勤めて居たと云ふN新聞の社會部の記事を丹念に目を通してしまうと氣になるやうにそつと次の座敷との間の襖を開けた。而して八疊の座敷の眞中に大きな丸い火鉢をかかへて机に向つて頻りとペンを走らして居る良人準一の顏を視た。

今年も既う餘すところは一週間、クリスマスだと云ふ今日を一生懸命に原稿を書いて居る良人を見ると傷はしい氣がして何とか優しい言葉をかけて見度くなつた、

『忙し相ね、少しお休みなさいよ。』と云つたけれど準一は振り向かうともしない厚い洋書と字書を兩脇に積み重ねて大きな机に俯向いた儘である。

芳子は常も六ケ敷い顏をして居る良人を、殊に仕事をして居る時の良人の刺々した顏を見るのが嫌であつた。目の前に控へた大晦日を人一倍に氣にする芳子は良人の氣嫌を損ねない樣にして仕事をして貰はねばならないと云ふ事ばかりに氣を揉むで居た。それと同時に自分の心の身體のやり場のない程の一種の苦しい壓迫を感じて折々絞り出される樣な涙が頰を傳ふのである。それを見ると準一は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『お前は病的だよ。何とか身體をしないといけない。』と心配した。

それ程迄に生活と云ふものに總ての自分を打ち込むでしまはなくつてもいいと思ひながら、芳子は生活に伴ふ不安が夜も晝も自分に付き纏ふて居る樣な氣がして何とかして其の苦痛から逃れ度いと悶いた。もう一度月給取にならうかとも思つて見るけれど社會と云ふものと家庭の一人である自分と云ふ者がどうもしつくりとあつて行かない。それに愛の情熱から醒めて實生活と理論の方面にのみ向つて行く夫婦の心持を思ふと悲しいやら佗しいやら、心細いやら、それに復雜な反抗心迄が伴つて芳子の心は毎日毎日苦しい爭鬪を續けて居るのであつた。

『インスピレーションだ。唯是れあつてのみ吾々の藝術は生きて居るのだ。今の藝術家にインスピレーションを持つて立つ者は一人もない。』と叫び叫びする良人の心持を思ふと芳子と同じ思ひに心を刳られるやうな氣がする何の樣な事に對しても非常な好奇心と熱情とを以て心を踊らして居た昔が戀しい。漸々荒むで行く心持、青春が消えて行く寂しさ、夫婦間の愛情さへ何處へやら、主義とか主張とか云ふものが其の愛情の拔けて行つた空間を滿たしてそれを世間に美しいもののやうに見せて居る事を思ふと芳子はたまらない程現在の自分と云ふ者が憐れになつて來た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『私は女だ。愛を生命にせよと神から命ぜられた女だ。』と叫ぶ事もある。が矢張芳子の心は準一と同じ足取りで感情の世界から理智の世界へと急いで行つた。

『私、何度昔の樣に物に興味を持たないのでせう。既う一度彼の頃の心持になり度い。』けれど二人の期待して居たインスピレーションと云ふものは何時來るか判らなかつた。

『インスピレーションも何もない。食ふための仕事だ。』と呻るやうに準一が叫ぶ時もあつた。

『どうせ此の世に生れて來たら出來るたけの歡樂をして死ぬ方がましだ。』と芳子は準一に云ふ事もあつたが、さう口に云ふものの芳子はいつも歡樂の場所からは遠去かつて居たので唯重苦しい生活に頭を押しつけられて、毎月くだらない婦人雜誌などに匿名で書くものに頭を腦す事が多かつたのである。

『是れじやあ仕方がない。私は何の爲めに生れて來たんだらう、』と口惜むで見るがどうとも詮方がなく矢張毎日一段一段と限りない生活の階段を苦しい吐息をつきなから登つて行くのであつた。

準一は息もつかずに書き終つた原稿を何の責任も感じないと云つた風に讀み返しもせずに綴ぢてしまつた。先づこれて今年の仕事も終りだ。五十枚で……だと心の中に年末收入

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の計算をして見てポンと原稿の綴りを火鉢の先方に投げ出して其の上に現れてくる表題を凝視てゐた。

冬とは云へ暖い日が毎日續いて外には風の音もしない。障子には暖かさうな日影が映してゐた。折々窓の外を人の通る氣配がして狹い道を自働車が窓とすれ〳〵に走つて行つた。此の先の高臺に露國人の家がある、其處へ毎日行くのであらうと準一は輕く心に思つたばかりで、是れから寢る迄何をして過さうかと考へて居た。此の時仕事を終へた後のゆつたりとした氣分が張りつめて居た身體を崩して行く樣に思はれた。

準一は家に居なくてはならない時は仕方がないが、家に居なくても何れでもいい時は必ず外を憧れて歩き廻るのが好きであつた。散歩にいい春や秋は云ふ迄もないが、夏の暑い盛りでも何となく家庭の外から心をそそるやうな何ものかを得たいと希つた。漸々濃くなつて行く葉櫻の下をすつきとした姿の西洋美人が白い肌が透いて見える紗の上衣を着て輕い足どりて小犬の鏈を曳いて行く姿などは最も準一の心をそそる詩のやうな自然であつた。秋の紅葉が散つて寒い淋しい木枯が武藏野の果てから都會の中に吹き入る頃になつても準一はよく郊外を逍遙つたり下町邊の華かな絃歌の巷を夢を追ふやうに歩き廻つたりした。而して荒むで行く寂しい心を何とかして暖め度いと希ふのであつた。

此の時又も準一の空虛な心の中に町の燈火が懷しい光に輝いて來た。そこで準一は出やうと云ふ氣分になつて重い身體をやおら起こして立ち上つて次の座敷へ行つて見た。髮を少し亂して白い細い首筋を見せて小さい新らしい机に向つて一心にペンを走らして居る妻を見ると、一人で呑氣に飛び出す氣にもなれなくなつた。

此の時芳子はぽつと上氣した顏を擧げて良人を見た。

『既う濟むで？。』

何となく潤ひを持つた大きな目を準一は見下すやうにして

『書いて終つた。是れから何處かへ行かうと思ふのだが……お前も行かないか？。』

『さうね。』と芳子は一寸躊躇した。それは二人で出ると行く時はいいがいつも歸りに不快な物足りない感を抱くのが厭であつた。

『原稿を書いてしまつた祝だよ。銀座の方へ出て見やう。』

斯う勸められて見ると芳子の澱んだ心も動いて來た。

『行きませう。早く坊やを寢かして置いて。』

『大丈夫だよ、お房が居るから。』

『さうね。』と云つて見たが、新聞社へ出る頃は一濟子供を構はない事にして居たので夜

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何程遲くとも泣き騷ぐやうな事はなかつたが、社を止めて家に居る事が多くなつた此頃では母と一緒でなければ床に就かない子供の事を思ふと多少氣にもかかつた。

結極は夕飯を濟まして子供が眠つてから出かける事にした。

二人が揃つて出たのは既う冬の日がとつぷりと暮れた六時過ぎてあつた。月のない眞暗な空には無數の星が力なく光つて居た。冷い風が準一のマントと芳子のコートに吹いて行つた。

大股に靜かに歩いて行く準一の後から芳子は白い足袋の足を細かに刻むで急いてついて行つた。

青山六丁目から來る電車は極く空いて居た。

準一は芳子と並むで坐るよりは相ひ對して坐りたかつた。而して昔の氣分を強いても繰り返して彼の頃の若々しさと情熱とを何とかして今の芳子から探し出したいと思つた。並むで坐るさへ氣のひける戀人同志が明い電燈に照らされて恥し相な面を臥せて折々そつと相思の眸を交へる——其の頃の芳子は今の樣に實生活に拘泥まずもつと〳〵空想的であつた。そつと見る眸にも無限の憧憬と愛情があつた。髮の毛も房々として眉の間に彼の樣な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

曇りはなかつた。頰がふつくりとして小さい口元から西洋人の樣な丸い顋の邊がたまらない程可愛らしかつた。と準一は凡そ一昔にもなる頃の芳子の俤を心に浮べて現在の妻をまじまじと視て居た。

明い電車の中は暖く若い女や男の眸が美しく敏く働いて居た。

芳子は偶々良人と連れ立つて出る時には良人が自分を視る眼が家に居る時と全く異つて居る樣な氣がした。妻として取り扱ふ時と戀人の樣に取扱ふ時とがある。活々とした良人の其の眸を外出の時だけ芳子は見る事が出來た。

壓し迫つた暮の氣忙しさは電車の中の人々の顏にも見えた居た。新聞を讀んで居るインバネスの人、兩手を固く拱むで思案して居るらしい商人、これから夜汽車に乘つて冬休暇を故郷に歸るらしい洋服の學生、職人、勞働者、八字髯の立派な紳士までも皆心に今年の終りの近付いて來たのを思つて居るらしくお互に刺々したやうな目を見交して居た。

二人は飯倉で乘り替へて銀座に向つた。芳子は宮城のお濠の水の上のみ白く燦々と光つて居るのを窓から顏を出して見て居た。柳の枝も淋しく瘦せて、行き交ふ人々の影も淡く光の下に見えて居た。騷々しいざよみの中に茲のみは現實の苦しい生活から放れて美しい藝術の世界があると云はんばかりに華かなイルミネーションの帝國劇場の高樓が聳えて居

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る。芳子はそれを見ると其の中の空氣を頻りに懷しく思つた。

二人が電車を尾張町で乘り捨てて肩を並べて明い町を行く頃は夜の空風が白い塵埃を立てて誰の頰をも遠慮なく吹いて行つた。瓦斯や石油の匂を散布させて夜店は忙しい人々の前に展べられて居た。二人は何の目的もなく道具屋の前に立ち止つては品定をして歩いた。芳子は何の店も負けない氣になつて美しく磨きたてて並べた紫檀黑檀などの器物を見廻した。而して十五六圓もするやうな机に手を觸れて見て欲しいとも思つたがそれは到底おぼつかないことゝ思ひ止つた。準一も亦何とはなしに種々な品物の價を訊くのみで其の儘行き過ぎてしまつた。暫くして不圖二人が足を止めたのはぼろ〳〵した日本綴の本を澤山並べた店の前であつた。誰の筆やら昔の御家流の滑らかな水の流れの樣な筆跡で榮華物語などを寫した綴本、其他大和言葉のゆかしさを其儘筆に現した幾冊かの古本。斯う云ふ中に思はぬ堀出物があると準一は目を輝して一々消えかかつて居る本の表題を見廻した。が矢張何の興味もなさ相に其の儘其の店の前をも去つた。芳子は其の店の老人の淋し相な顏を見て忘られ行く是等の本に對照して何となく心に憐れを催せずには居られなかつた。

歲暮大賣出の提灯の下を丸髷や束髮の女が大きな包を抱へて希望足つた樣な顏をして下駄の音寒く行き交ふ。其の中を芳子は心寂しさを覺え乍ら店々の飾棚を覗いて歩いた。吳

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

服屋の前には同じ樣に寂しい寒さうな顏をした老人や娘が三四人立つて居る。別に買ふ目的もないらしく唯手の屆かぬ處の品を望むやうにまじまじと視て居た。芳子も其の人々の中に這入つて縞柄や模樣を心に批評して居た。準一は芳子から四五間先の古本屋の前に立つて居たが、芳子の姿が見えないので人々の間から四邊を見廻し乍ら引き返して來た。が餘念なげに覗いて居る妻を見ると一種の不快を感じた。

『ねえ、貴君、貴君の好き相な柄じやあないの。貴君に買つてあげ度いわね。』と後に來て立つて居る良人に芳子は硝子戸の中の大島絣を指差して斯う囁いた。其の刹那準一の心は急に和いで

『それよりか彼の模樣がいゝね。お前が着たら似合ひ相だ。』と準一は芳子の身體に派手な養老お召をくつつけて想像して見たが、結極は唯見てさう思つたばかりで又眞直に日本橋の方へと歩いて行つた。

明治屋の華かな燈火の中から浮き立つやうな樂の音が電車の響の間に靜かに流がれて來た。救世軍本營の前には慈善鍋が据えられてあつたが誰もそれを見向うともしない、勝手な自分の事ばかり考へて通り過ぎて行つた。

二人の心は一度味つた事のある幸餡の暖簾へと志して行つた。がそれは銀座橋よりも先

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なので其庭迄行くのが面倒になつて、準一はとある小暗い横町に曲つた。四五間行くと其處に二人が行かうとした店と同じ樣な屋台店が出て居た。準一は急ぎ足に客の一人も居ない暖簾の中に入つた。芳子は何だか氣まりの惡いやうな氣がして、それでも隱れる樣に良人の後に續いた。

十五分も經たないうちに二人は再び其の黑い暖簾から出て來た。

『餘りおいしくなかつたわね。』と芳子は暗い蔭で良人の顏に近く囁いた。

『ウゥ、矢張幸鮨の方が美味ね。』と未だ赤い肉の味が口の中に殘つて居るのを味ふやうにして準一は妻の顏を見返した。

二人は又默つて今來た道の方へと引き返した。敷石道を往き交ふ人々の下駄や靴の音が如何にも年の暮の忙しさを思はせる。今夜はクリスマスだと云ふのに日本人には何の娯も面白味もなささうに唯々追ひかけられるやうに寒さうに袖をすぼめて急ぐのであつた。斯うした町の中を二人は異つた事を思つて歩いた明い店の前には必ず四五人の客が立つて居た若い女の心を唆る樣な吳服屋や小間物は殊に華かに見えた。

準一は寒さうに震へて通る女の顏を珍し相に見送つた。而して折々遲れがちについて來る妻の姿を人々の間から探した。芳子は家にゐる時はいつも六ケ敷い顏をして自分などの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

事は少しも念頭において居ないやうな良人が斯うして二人で外に出た時は頻りに自分と云ふものを心に止めて呉れるのが何より嬉しかつた。其の時の心の中には全く二人の心は昔の戀人同志の頃の心持になれるやうに思つた。

準一は夜店の方ばかり見て居たが芳子は繪葉書屋の前に立つたり、西洋菓子屋の色彩の美しさに恍惚としたり呉服屋や小間物店の飾棚の中を覘いたりして歩くうちに遂々良人を見失つてしまつた。が暫くしてから半町も先に白ぽいマントの良人の後姿を認めたので足を早めた。

準一は妻の事を忘れて他の事を思つて歩いてゐたが不圖今夜は妻と一緒に出たのだと云ふ事に氣付くと足を止めて後の方を見返つたそれと見た芳子はフとインバネスの男の蔭に隱れながら良人に近づいた。自分の事と思つて探して居る良人を驚かしてやらうと云ふ惡戯らな子供ぽい氣分になつて良人が遠く目を送つて居る前を行くと不意に其の前に現はれた。

『何だ。何處へ行つたかと心配して探して居たんだ。』

『さう。』と二人は顏を見交して莞爾として今度は肩をすれ〳〵に並むで歩いて行つた。

尾張町の十字街を通り過ぎると

『ね、久しぶりだからカッフェーへ行かう。』と準一は先に立つて電車道をつつ切つて小暗い淋しい道へと曲つた。四邊は黑い建物ばかりで極く淋しい。既う十一時近くでもあらう夜店をしまつて歸つて行く荷車の光が小さく消えて行く。間もなくとある明い洋館のドアを押して二人の姿は闇から光に吸ひこまれたやうに消えた。

セセッション式の大理石卓に相ひ對した二人の顔は多くの客の中に生々（いきいき）として輝いて居た。若い藝術家や女優などのよく來る茲の家は一種の新らしい空氣と西洋の味がある。斯うした空氣の中から新らしい文藝運動が生れ出たと云ふ西洋（あちら）のことをも二人は思つて見た。

ブラジルの珈琲を芳子は口にした時、其の香ばしい臭と味に何とも云へぬ快さを覺え。

『ね、貴君、そらよく彼の頃は……』と云ひかけて良人の顔を見た儘芳子は默つてしまつた。四邊の人々が二人を見て居るらしいので準一は澁い顔をして見せたのであつた。

芳子は珈琲の茶椀の中を凝視ながら六七年前頃の事を想つた。

二人はそつとしめし合はして郊外の停車場から武藏野の方へと出て行つてよく淋しい原を手を把り交して歩いた。秋の落葉のカサコソと足に音する森の中を赤く熟した實を拾ひ乍ら果てしもなく逍遥つた。又時としては隅田川の上流を風流な小舟で越して霜溶けの畑道を盡きない話に一日を過ごして軈て黄昏の町の方へ歸つて行つた、而してカッフェーや

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

西洋料理屋の暖い明い燈火の下で其の日の印象を語りあつた。芳子は又スープを飮む度に一度二人で郊外からの歸りにとあるレストラントでスープの中に浮むだ英字から Love と云ふ字を拾つて口に入れて吳れた良人の事をも忘れなかつた。さうした甘い思ひ出は寂しく暗くなつて行く芳子の心を折々明くするのであつた。

芳子が斯うした思ひ出に耽つて居た時急に背後から樂の音が響いて來た。心を唆るやうな其のピヤニーノの洋樂の音は萬場の客の心を現實から空想の甘い音調（メロデー）の中へと恍惚と引き入れて行つた。準一も芳子も思はず目を見交した。

二人が其處を出て電車で麻布の高樹町へ降りたのは十二時近くであつた。既う人通りもない小暗い道を遠く夜番の拍子木の音を聽き乍ら手を把つて家の方へと歸つて行つた。二人の心には何となく暖い心が流れあつて、握りあつた手から手へと若々しい血が傳つて行くやうに思はれた。『若さ』をいつまでも二人の心に放すまいと云ふ心持が、此の年も暮れて行く冬の夜の空氣の中に犇々と感ぜられた。

家の前まで二人が來た時急に中から響いて來る子供の泣き聲に驚いた。

『あ！　泣いて居る。』

今迄の醉つたやうな心が一時に醒めて二人は心忙しく門の中へと這入つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

妬み——矢澤孝

日とよるをしづこゝろなく待ちむかへ今宵泣くべくきみと逢ひにし

泣きながらひとりぞかへる狂女に黒き夜かぜのふさはしきかな

うつゝなく夜の街かへりひとり寝の床にさめ〴〵さびしさを泣く

憤るこゝろをひめてきみを見るわが瞳やいかに冷たからまし

ともすればあふれて落つる涙をばかくす伏瞳(ふしめ)のそら笑ひかな

胸やぶれあかき血しほのみなぎれるなかに見いでしわれのなきがら

すきまより洩れくる光白けれど朝戸なひきそものおもふ子に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

花も葉も散りつくしたる庭の樹の春まつごとくきみを思へり

二夜三夜ねむらぬ瞳いねわびぬみむねの底をふかく知らむと

灰いろにわが世をぬりしきみをしぞなほも見つむる瞳かなしき

しみ〴〵とゆふべの鳥もかなしけれ今宵來らぬきみをおもへば

くろかみのつやも失すらむ頬もやせむあすみこゝろのわれにかへるも

ちまたにはわれらがきその姿ともおもほゆる子のゆきかふものを

きそはわがうけし妬みにほゝ笑みぬけふわがねたむ狂ほしさかな

いたましやおもひわびたるわが胸はうつろのごとししばし思はず

きみ待ちてつぐさくら炭いくたびか灰となりけむ狂ほしき宵

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あめつちもわが世もとみにくつがへる一夜そむきしこの君ゆゑに
ねたまねどわれより劣る少女にもよきことを云ふきみのあさまし
あはれともおもはれて來ぬ男ごゝろのかるくうつるをさげすむはてに
たはれ男はわれに云ひたる言葉もてかの女にも今宵云ふらむ
言葉のみうち交ゆれどとゞこほるもの胸にありしらけたる宵
悪魔ぞとむねにするどくのゝしればきみが面かげうすれてやすし
わが泣くをやまひのごとく扱へるきみのいづくにきなふを見むや
泣きてこよなほかくおもふ一すじのこゝろたのみの去りやらぬかな
その胸にわれのかげさへとめぬかとおもへばさびし強くゐれども

きなふまでわれの外には何ものも見ざりしきみにおもひあがりぬ
あやまちはわれにもありとおもへどもおもへどもなほ君のつめたし
やるせなくひとり泣く身の何故に逢へばぞつよく銜ふこゝろぞ
そのむねに泣きてすがらばあたゝかききそのわが世をかへすと知れど
しみ〲と身をさびしさのおそふさきいとせめてにくき人のこひしき
この戀を捨てながらかつおん胸に死ぬばかり泣く時をしぞ戀ふ
火のごときこゝろとこゝろいとつよく恨みかはしぬいかになるらむ
いつとくるものとも知らずわれよりはゆづらぬこゝろかなし苦しき
何ゆゑにかくもはげしき性なるとつく〲われとわれをうらめど

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

このまゝに氷るおもひか燃えかへし身をやく戀かいまはさだめす

わかれてもつよくあらむとねがふ身に女の姿おところへさせな

この戀の全からむをあまりにもふかくのぞみて破りけるかな

戀をわれはかなきものと云ひながらなほも一途にたのみしわざわひ

ある男の夢(習作)――岡田ゆき

人物

牧野純三。　青年洋畫家。

夢　助。　灰色の衣服を著たる男。

小田妙子。　純三の以前の戀人。

お　民。　小田家の小間使。

お　春。　純三の女中。

現　代。　晩秋の月夜。

小田家の庭。(夢の場)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

舞臺は右手よりに、洋館の二つの窓を見せ、其下手は窓に續いて、バルコンがある。正面より左手にかけて奥深い、植込みにも、松楓など程よく植へてある。殊に楓は紅葉して、月の光りに美しく見える。洋館の窓から、電燈の光りがさして、月の冷い色と、溶け合つて、居る樣である。この窓から、舞臺の對話の邪魔にならない程度に、靜かな、ピアノの音が洩れて來る。

幕が開いても、少時靜かで、月の光りのみ、只、徒らに、さへて居る。

やがて、青年洋畫家、牧野純三、(二十八九位ひにて、美しき容貌。)紺の背廣にて、黒い帽子を手に持ち、無理に、歩いて、居る樣子で、始終目を伏せ勝ちに。灰色の衣服を着た、夢助(この男は、若者とも老人ともつかぬ、不可思議な容貌、ものごしをして居ながら、しかも、人を魅する力を持つて居る。)に伴はれて、花道より登場。

夢助。(前の話の續きの心にて。)さあ、さうこうしてゐる内に、お前は、やつぱり、彼の女の力に、引きよせられて、此處迄來たぢやないか。これでも、お前は、自分の心に、もう、彼の女は、ないのだと、强情をはるのかい。

純三。(初めて、目を上げて、夢助を見、轉じて、舞臺の下手をきつと見る。)僕は一人で來たのぢやない初めて、今夜逢つた、不思議な君が、いやがる、僕を無理に伴れて、來たのぢやないか。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夢助。ハヽヽヽヽ（突然聲高く、むしろ狂的に笑ふ。）駄目だよ。いくら、そんな事を云つたつて來たのが、もう證據ぢやないか。おれは、お前が、妙子を思つてるから、惡いと云やあしないんだ。只お前が心と口とをまるで違へて居るから、おかしいんだよ。どうだ。（純三の肩に手かける。）

純三。（苦笑しながら、）僕は君に、嘘を云つたわけぢやないんだけれど。彼の女の事は、僕の心の何處にも、ひつかゝつて居ないと思つて居たんだよ。ところが、今夜君に、四年前に別れた、君の妙さんに逢はしてやるから、來ないか。と云はれた時、僕の頭に、はつきりと妙子が浮んで來た。然し。僕の心の中に、生きて居る彼の女は、少なくも、今の妙子ぢやない事を覺えてゝ呉れ給へ。

夢助。おう、さうかい。君は大變温順（おとな）しくでたね。それでは、つまり、君の心に生きて居る妙子は、四年前に別れた、妙子でなければならないと云ふんだね。（話しながらそろ〳〵歩いて、いつか、舞臺に來る）

純三。あゝ、さうなんだ。それと云ふのが、四年前の秋、別れたきり、往來で行きあつたつて、口をきく機會もなかつたんだもの。今日妙子がどう、變つて居るか、わからないぢやないか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夢助。だから、今、おれがお前に逢はせるから、よく彼の女と、ぢかに、話すが好い。

純三。それにしても君は、不思議な男だね。妙子とも知りあひなのか。

夢助。君を知つて居る樣に、妙子も知つて居ると同時に、おれは、人間といふ人間は、總て知つて居る。おれは全人類に、夢を與へる男なのだ。君が澤山の繪具を用つて、君の思ふ、色彩の繪を描く樣に、おれは、過去、現在、未來の事物を組合はして、數多い人に與へる男なのだ。世の人が眠れば、おれの支配のもとに生きるのだ。

純三。（呆氣れて、夢助を見る。）

夢助。おれの事を話す前に、妙子の事を話さねばならない、おれはちやんと、知つて居る。妙子の事をお前の心は聞きたがつて、うづ〳〵して居るのを。（意味ありげに笑ふ。）

純三。（默つて。松の根下の石に腰を下す。）

夢助。そして、彼の女の心が、君からまるで、はなれて居る事も知つて居るんだ。

純三。君に云はれないでも、彼の女と別れた時から、彼女の心が、僕からまるで遠くへ去つた事は、知つて居るんだよ。

夢助。何もかも、知つて居ながら、何故お前は、あれ程彼の女を愛して居たくせに、自分へかへる方法を考じなかつたんだ。意氣地なし。お前にそれだけの力がないんだね。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それでゐながら、やつぱり、お前は彼女を忘れられないんだね。

純三。君はそんなに云ふけれど、妙子は、かたつむりの様に、自分の生れた家から出られない、弱い女なんだ。自分が生(ライフ)を受けた上から他へは行かれない、所謂女なんだよ。

夢助。其の弱い女を、強くするのが、お前の力ぢやないか。今、おれは妙子をこゝへ來る様にするから、お前の力で妙子を、お前の胸にかへらせる様に試めしてみると好い。お前が云々する彼女は四年前の彼女なんだね。少くも今は、もつと大きい者になつて居るよ。（何か云はふとする、純三を目で制して、）シツ。妙子が來る。（この時室内のピアノ、はたと止む。）

純三の後を通つて、夢助、消える如く、舞臺より去る。）

此の前より、月に雲がかゝつて、光りが前程さゝなくなる。妙子。小田家の一人娘にて、丈やゝ高く、すつきりした、容姿、華美な堅縞の袷に、同じ柄の羽織を著て、髮は前髮を割つた、ローマ二結び、眞白な花を、左方の後に、落ちさうにさして居る。美しい目と、澄んだ聲を持つて居る。眞紅なスリッパをはいて居る。疲れた樣な目で月を仰ぎながら、バルコンより庭へ下りて來る。

妙子。あゝ、今迄さへて居た月も、かくれてしまつた。（室に向つて、）誰れか。ちよいと。

お民。（十八九の美しい女、バルコンに現はれる。）お孃様お召しで御座居ますか。

妙子。あ、民かい。あんまり月が好いから、庭へ出たら、あひにくに雲が出て來たのよ。い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つそ暗いなら、何もかも暗い方が氣持ちが好い。お前ね、其處の燈火も消してお呉れな。

お民。はい。あのお孃樣ピアノも、ふたを致して、よろしゆ御座居ますか。

妙子。さう〱。私が忘れたのよ。お前、ちやんとしておいて、お呉れな。

お民。はい。(室に入りやがて、電燈を消す。)

雲を通して、淡い月光が、舞臺を薄明くしてゐる。

純三。(默して立つたまゝ、木影より、妙子を見て居る。)

妙子。もう秋も赴くのかしら。この二三日でまあ、めつきり楓が紅くなつたこと。步く度に、カサ、コソ、と鳴る落葉は、ほんとうに、おどけ者だね。(微笑して、落葉をスリツパで、もてあそぶ樣な風をする。)

純三。妙さん。(木影から現はれる。)

妙子。(キツトして、純三を見る。)まあ、誰れなの。まるで野良犬の樣に、垣根の破れからでも、忍び込んで來たやうね。

純三。妙さん、僕だ、牧野です。(妙子の方へ來る。)

妙子。牧野さん。隨分久しぶりですね。どうして、又私の所へいらつしつたの。貴方は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

男らしくない方ね。（冷やかに純三を見る。）

純三。妙さん。貴女の云ふ通り、久しい間、逢はなかつた。あれは四年前の秋だつたね。覺えて居ますか。

妙子。えゝ。四年前の秋ですつて、たしかに覺えて居ますわ。未だ何も知らなかつた私に、ある男が、戀と云ふ事を私語いたのを、どうして忘れるものですか。けれど、私は四年の間に、變りました。いつまでも、私は十七の小娘ぢや居ませんよ。（皮肉な調子で云ふ。）

純三。さうか。僕は、妙さんを思ひ違ひして居た。まう何年か前の妙さんには、かへれないのか。そんな傲慢な態度を、とつたつて、徒らに、心の空虛を他人の前に、曝露するに、過ぎないぢやないか。

妙子。私の心が他人にわかるものですか。少くも貴方には、おわかりになりやしませんわ。今、私は、より大きく自分を育てたいと思つて、きつと、凝視する樣な、態度で、努力して居るんですの。私はさう思つてます。彼の時に、貴方の愛が力強く私に迫つて、前後の考へなく、貴方の所へ行つてしまつたから、其の當時は、自分の身の幸福を感じたかも知れませんけれど、今頃は必ず、みぢめな目に逢つて居るに違ひないわ。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お互ひのためにゝこうなつた方が幸福ですよ。

純三。あの男が云つた樣に、妙さんも變つたものだ。僕が心から、戀した彼女は、可憐らしい、可愛らしい女だつたがな。今僕の目前に居る樣な、强がりばかり、云ふ女ぢやなかつた。(半ば、獨言の樣に云ふ。)

妙子。私は、强がりばかり云つてやしませんわ。人間は過去ばかり、夢みて居たら、到底立派なものになる事は、出來やしませんよ。現在を少しでも、善く生きたいと、願つて居れば、それだけ意義ある日をすごす事になるんですわ。

純三。それでは、妙子さんは、現在の僕が、あきたらないと云ふんだね。

妙子。え、さうです。私は、過去にばかり生きて、いらつしやる、貴方を、あきたらなく思ひますの。もつと男らしく、はき〳〵なすつたら好いぢやありませんか。私は貴方によつて、總ての男が持つて居る、いまはしさを、見せつけられた氣がします。

純三。さうは云ふものゝ、女はいつか一度は男の胸に眠るべきものだ。

妙子。貴方はさう信じていらしつしやるの。ホヽ、私はさうは思ひませんわ。男の胸に眠らねばならない女ばかりはありませんよ。貴方の知つてらつしやる、一人の女を捉へて、女はあんなもんだと、早合點なさると、とんだ間違ひになりますわ、(冷やかに、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

笑ふ。）

純三。（絶望的な目をして、妙子を見て默つて居る。月雲より出でゝ、二人を照す。沈默やゝ長く續きし後。）妙さん。貴女は、何んで、そんなに人が變つてしまつたんだ。僕は悲しい。（語尾消える。）

妙子。貴方は悲しんでいらつしやる樣だけど、私はむしろ貴方に感謝しなければなりませんわ。四年前迄はまるで、心の目を開けて、世間を見る事を知らなかつた、私を、こんなに變らしたのは、貴方ですもの。

純三。けれども妙さん、いつ迄若くはない、結局は死場所に、落ちつかねばならないんだらう。僕は妙さんの來る日を待つてるんだよ。

妙子。其のお志は、ありがたう存じますけれど、私は男と云ふものがいやになりました。貴方の所へ行かない代りに、誰れのもとへも行きません。生涯私は自分が一番好きなんですの。自分をおいて、他人に信頼しやうとも、愛されやうとも思はないのですよ。（此の時、室内より、お孃樣お孃樣と連呼する聲きこゆ。）あゝ誰れか呼んで居りますから、是れでお別れしますわ。さよなら。（輕く會釋する。）

純三。あ、一寸、妙さん待つて呉れ給へ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

妙子。（純三の呼ぶに、耳も借さず、くるりと身を返して、吸ひ込まれる樣に、バルコンより入る。）

夢助。（木影より忽然として現はれ、ぼんやり立つて居る、純三の側に來る。）おい、どうだつたい。妙子は變つたらう。さあもう用はないんだ。歸らう。

純三。又、君は出て來たな。僕は君を恨む。美しい四年前の幻想を、めちや／＼にされてしまつた。僕が心から愛した彼の女は、あんな女ぢやなかつた。それが皆、お前のためだと思ふと、おれは悲しいんだ。

夢助。（ニヤ／＼笑ひながら、）お前の戀人に、お前が逢ひたがつて居たあの女に逢はしてやつたのに、禮も云はず、恨むとは、何んて云ひ草だ。お前は馬鹿だな。妙子を解す事るも出來ない、哀れな男だ。意氣地なしだ。お前は、いつ迄此處に、うろついて居んるだ。おれと、行かないか。

純三。（潤む目に、夢助を見る。）

夢助。それぢや、おれは行くよ。お前は勝手にするが好い。其處にいつ迄も、さうして居れば、月の光りがお前の體を包んで、冷い、石よりも冷いものにして、しまふだらう。冷い穴に來るものは、恐ろしい死だよ。どれ、おれは、行かう。（さつさと花道より引込む）

純三。（ハッと我れにかへり）、おい〳〵待つて呉れ。僕も行くから。おい君には未だ話があるのだ。（つかつかつと、二三歩前に出て、夢助の去つた方を凝視する。）

ダーク、チエンヂ。

純三のアトリヱ。

舞臺、正面に、大きな窓がある。其右手よりに、壁を後にして、高ひ、セセツション式の書棚があつて、澤山の書物が、ぎつちり入れてある。此の書棚と並んで、机と椅子がある。

正面より、やゝ左によつた方に、テーブルがあつて、其上に、煙草の箱、灰皿、美しい色の草花の鉢など、小奇麗にのせてある。其のテーブルを取り巻いて、二三の椅子がある。皆、氣の利いた色や、デッサンである。

下手のドーアより、隣室へ行ける心。壁には、數多、大小の額が、程よく、かけてある。其他、二三枚のエッチングが、ピンで止めてある。室の隅に、畫架やら、繪具箱。書きかけの畫など、ごた〳〵に、置いてある。下手よりに、ソフアがあつて、純三、前の場と同じ、服裝にて、なが〳〵と、假眠（うたゝね）をして居る。

天井明取りの、ガラスと窓から月の光りが、皎々とさして居る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お春。（四十五六にて、長年純三に仕へて居る女中。周圍をこめた、小さな丸髷に結ひ、地味な著物に、黒繻子の帶を、きちんとしめて居る下手ドーアより登場。）若旦那樣、おやまあ、どうなすつたんだらう。電燈もおつけにならないで。（そろ〳〵と中央の電燈に歩みよりパッとつける。室内一時に、明るくなる。）あらあんな所へ假眠なすつて、又、御風邪でも召すと仕樣がないのに。（純三に歩みより、搖り起す。）

純三。（目を開き、電燈の光りに、目を射られまぶしさうにする。）何んだ春か。今、思ひもよらない夢をみた。

お春。若旦那樣、どんな夢を御覽になりましたか存じませんが、假眠などなすつて、御風邪召すと、いけないぢや御座居ませんか。

純三。大丈夫だ。風邪などひきやしないよ。（立ち上りて、テーブルの上の、煙草の箱より卷煙草を一本取出して、マッチをつけ、再びソファにかへる。）

お春。（純三の側に膝をつく。）私今迄、あちらで、お松さんと、御用を致して、居りましたんですけれど、もう、ほゞ、かたづきましたので、何んの氣なしに、此方へまゐりますと、若旦那樣は、大變お靜かの樣でいらつしやいましたので、どうなすたかと存じま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して、さうつと、戸を開けますと、お寢みなすつて、おいでなさるんで御座居ますもの。まあ何をそんなに、お考へ遊していらつしやいますんですか。

純三。なあ春や、お前は妙さんをまだ覺えて居るかい。

お春。小田さんの御孃樣で御座居ませう。えゝ覺えて居りますとも、何んで忘れますものですか。眞實に、御優しい、美しいお方でしたつけ。どうしていらつしやいますでせうねえ。

純三。僕は今、一度寢た間に、妙さんに逢つて話した夢を見たんだよ、

お春。善い夢で御座んしたか。又は惡い夢で御座居まして。（笑ひながら、純三を見る。）

純三。僕にとつては只、善いも惡いもない、思ひがけない夢だつた。忘れかけて居た、古傷を、何んの思ひやりもなく、手酷くさぐられた樣な、氣になつたよ。

お春。私でさへ　時々ひとりで居ります折りなど、あのお美しいお目を思ひ出す事が御座居ますもの。若旦那樣が御思ひ遊すのは、決して御無理は御座居ません。何んですか、こうして、お獨りでいらつしやる、貴方が御氣の毒でなりません。（目を潤ませる。）

純三。　でもね、お春、僕には親しい友達が居る。第一僕をよく解して呉れる、お前が居るぢやないか。寂しかない。勝手に僕から去つた女は何んとも思やあしないんだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お春。　眞實に私はうれしゆ御座居ますよ。立派な旦那樣におなり遊した今日でも、私は番町（純三の生家）の洋館の階段を一つおきに、登りつこをしやうなんて、夢中になつて、淸樣と（純三の兄）御惡戲をなすつた、御樣子が目に殘つて居ります。未だ學習院の初等科に御通ひ遊す頃でしたね。妙子樣もあの頃は、御可愛らしい御孃樣でいらつしやいましたつけ。

純三。　さう〳〵、二人とも幼さかつたな。あの時分から僕は妙さんが好きだつた。彼女がお母樣に伴れられて、來ると、僕はさうつと、客間の窓下へ行つて、内の樣子を立ち聞いたものだつけ。するとよくお前が、お母樣の御話の間、お庭を見ませうなんて、妙さんを伴れて、僕の居る所へ出て來たつけな。それがいつもお定りになつて居つたつけ。幼い時の追憶は美しいものだ。

お春。　私はお二人が遊んでいらつしやるのを見まして、眞實にお可愛らしい御夫婦の樣だと、一人で思つて居りました。けれど、今となれば、御二人とも御存じない方達でしたら、こんな思ひを遊さなくともよろしゆ御座居ましたんですね。（無言に純三が、沈思して居る、樣子を見て。）まあ、若旦那樣こんなお話は止しませう。御覽遊せ、お月が好ふ御座居ますから。（立つて窓を開ける。）

純三　好い月だねえ。（立ち上り電燈を消す。）月の光りが、さし込む中に居るとまるで、海の底に居る樣だ。何んとも云へない色だな。

お春。眞實に好い月で御座居ますこと。さういへば、若旦那樣、今日御留守に、奥樣がいらつしやいまして、明日の御夕飯には、暫しぶりで來る樣に、待つて居るからつて、おつしやつてで御座居ました。私、まあ、すつかり申上げるのを忘れて居りました。

純三。さうかい。御母樣がいらつしつたのか、留守で失望なすつたらうな。明日は行かなければならないね。

お春。そして、若旦那樣何んですか、奥樣も御逢ひ遊したい樣な御口吻で御座居ました。今日は、どちら迄行つてらつしやいましたの。

純三。僕かい。お前には後藤の所へ行くと云つて出たけれど、只、獨りで往來を歩いて行く内に、ふつと、人と顏を合せるのもいやになつてしまつて、重い心持ちになつたので、後藤の家へ行くのは止しにして、郊外を目的なくぶらついて來たんだよ。そして、僕は、僕が一番、親しみを持つ事が出來る、自然の内に、心ゆくまゝに、ひたつて來たんだ。（テーブルの側の椅子にかける。）

お春。（テーブルを、隔て、立つ。）郊外の秋は如何で御座居まして。さぞよろしゆ御座居まし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てせうねえ。

純三。　あゝ隨分好い色だつたよ。僕はかなり歩いて、ふつと側を見ると、こげた樣な、幹の色をした、杉の木立があつた。枯れかゝつた、雜草は絹布團の肌ざはりの樣であつた。其所へ僕は、大の字なりに、横になつて、大空を、まぢ〳〵と眺めて居た。その時、自分が小さな者に思はれて、果ては、うら悲しい、心持ちになつてしまつたよ。それから又其處を出て、自然と、自分なんて事を考へながら、どう歩いたか、わからない道を、歩きまわつて、やつと歸つて來たんだ。そして、疲れを休めて居る内に、うつかりねむつたとみえて、あんな夢を見たんだよ。

お春、　まあ、左樣で御座居ましたか。けれど若旦樣後藤さんを、御訪問遊す御約束では御座居ませんでしたの。

純三。　さうだ、僕は約束したんだ。きつと、待つて居るだらう。けれども後藤の事だから、僕の氣が變る事も知つて居るよ。

お春。　でも御氣の毒で御座居ますね。折角待つていらつしやいましたでせうに。

純三。　僕はこうして、話して居る内も、妙にさつきの夢が忘れられないんだ。あゝこうやつて、月の色を見て居ると、夢の續きの樣な氣がする。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お春。それでは、電燈をつけましたら、よろしゆ御座居ませう。（電燈をつける。）ねえ、若旦那樣、いやな夢は御忘れ遊しませ。

純三。（他の事を考へて居るらしい樣子で。）總て、過去を忘れる事が出來たら、人間はどんなに幸福だらう。春、何んだか急にもの寂しくなつて來た。今から僕は後藤の所へ行つて來るよ。（立ち上る。）

お春。只今からいらつしやるんで御座居ますか。

純三。あゝ、急に逢ひたくなつて來た。外套と帽子をお呉れ。

お春。はい。（そゝくさとドーアより退場。）

純三。（ツボンのポケットへ兩手を突込んで、無言に室内を歩きまはる。）

お春。（帽子と外套を持ちて、再び登場。）若旦那樣持つてまゐりました。

純三。あゝさうか。

お春。（外套を純三にかけ、帽子を渡す。）

純三。（帽子を受け取り右手に持ち。）ぢや春、行つて來るよ。後藤に逢つて來たら、さつきの夢も僕の心から消えるだらう。なあ春、僕のこうした、氣持ちは、子供の時から、ついて居る、お前によくわかる筈だ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お春。　左樣で御座居ますとも。それでは行つていらつしやいまし。お氣をおつけ遊して

ね、若旦那樣。

純三。　あゝ。（つか〳〵とドーアの前迄行きふりかへり、お春と顏を見合はして、ニイーッと笑ふ。）

靜かに幕。

大正三、一二、一八

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お目に懸つた生田花世さんに就いて——原田皐月

『非難し非難せられるのもこれは所謂佛法の『緣』で私は貴女の方へもつと私をよせて行つてあなたを得たいと思ひます』『あなたの目と私の目とを見合さない以上は非難も辯解も力が弱いと思ひます』

斯うしたお手紙を頂いて御訪問を受けました日は、冷い風が路傍の雪を吹いて居りました午後でした。

折角のお越しを口不調法の私一向に御得心の行く樣にお話の出來なかつた事を遺憾に存じて居ります。實は正月の二日に御宿の平塚さんのお宿で反響新年號を拜見した時、私はも一度『生きて行く道』に付いて貴女に云はして頂かなければならないと思ひました。其後お目に懸るまで。處が貴女にお目に懸つてあの人生の外廓許りをぐる〳〵廻りして只同じ處に徒らに行き疲れて被入るおいた〳〵しいお風情に接しては、もう何を申上げる氣にもなれず只『お氣の毒な方』と云ふ一語に凡てを含ませて置きたくなりました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今はあの反響新年號の貴女の一文に對して何を申上げるのもいやですから只此處にはお目に懸つた花世さんを書かして頂きます。そして貴女が來月號に書くと被仰つた私に付いての事を反響誌上におまちいたします。

お目に懸つた貴女を總括して考へますと何處迄も何處迄も只輪廓的に生きて行く方だと思ひました。御飯を口へ運ぶ外には生きて行く道を知らない方だと思ひました。貴女があの時目をつぶつて順々とお說きになつた事は凡て斯うしなければ世の中はお飯が頂けませんと云ふ事許りでした。

私は具體的生活の輪廓丈けを持廻つて徒らに憐みを乞ふみじめに痛ましく實生活に打破られた女一人を眼の前に見せられた氣持ちでした。

貴女は『十圓を貰ふ爲に私は頰を打たれました。生きて行くと云ふ事はそんなに苦しい事なんですよ』と幾度か念を押して被入いましたが、私がいくらその御苦みに御同情申上げてもそれに依つて十二月號の『生きる事と貞操と』を一字でも割引する程の私は自信のない事を叫びはしないのです。貴女の値となさる實生活の苦しみは貴女に何を敎へたでせう。世に媚びる事と人に同情を求める事と全世界の何者よりもパンの尊い事を人より多く知つた事を貴女は人に誇り得る丈けだと思ひます。貴女の誇りとして被入る實生活の苦し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

みは私から考へるとそんな誇り他誇りとするものはない樣に考へられます。實生活に勝ち得たと云ふ事は其一つ〱のためしを勝ち得て强い全人格を築いた處にあるのです。決して自己のエッセンシャルな或物（貴女の一方の心はそれを肯定し一方の心は無理からそれを否定し樣として被入る）を葬つて、其場を繕ろつて『私は弱い女なんです。ほんとうに弱い女なんです』――あのお目に懸つた日私の前に貴女はさうお叫びになりました――と叫ぶ筈のものではありません。貴女の誇りは弱い處にあるらしい。女の弱さを曝け出して救ひを求める處にあるらしい。

それならそれで貴女はさうして生きる方として私は默つて見過して了ふでせう。然しあの日の貴女は私は弱い女ですと云ひ乍ら何とか御自分の行爲に價値付け樣として被入る。そして頻りに無意識のうちに自己辯護をして被入る事を御自分であの時肯定して被入つた。私はそれが一番貴方の惡い事だと思ひます。惡いと思つたら何を價値付ける必要があるでせう。現在貴女は私の前に過失だと被仰つた。あの御自分の操とパンとを取かへた事を。過失しをかしな言葉ですか――と知らず何故『あれを否定されると私の生存の存在がなくなります』と云ふお言葉が幾度も繰返されたのでせう。貴女の生存には過去がどれ丈け有力なのです。人間は現在生きて居るのです。現在生きるのに過去の價値で生きるわ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

けはないぢやありませんか。まして過去の『過失』で生きる必要はありません。貴女は眞に生きたい自分の存在を世の中に置きたいとならば現今の貴方の價値に生きたらいゝでせう。何を苦しんで自ら過失と呼んで居るものを方々へ持ち廻つて見苦しくも多くの同情の蔭にかくれて小さく安心し樣として被入るのでせう。貴女の樣に過去の過失を同情され肯定されなければ自分の存在の意氣がないと云つて悶えて捕らはれて居た處が御自身に過失と見えて居るのを如何する事が出來るでせう。御自身の想を如何なさらうと云ふのです。

貴女の現在は貞操から超越して如何でも斯うでも貴女御自身がお呼びになる過去の『過失』なるものを價値付け樣として被居ると云ふのは私には分つて居ります。そして超越し切れないで又ずる／＼と過失の中へ辷り込んで苦しがつて被入る事もよく分つて居ります。

其麼自信のない事だつたのを貴女は何の爲に平氣で發表なすつたのか私は御自身に對しての不忠實をお憐み申外なくなります。

貴女はあの日お別れ致す前に

『パンの爲に處女を破ると云ふ事は――私は單に處女を破ると云ふ事が貞操を破ると云意義の全般ではない事とくれ／＼も申たのですか遂にお分りにならなかつた樣でした。あな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がち處女でなくともいゝのです。已人の存在と云ふのは貞操の有無で定まると私は信じます。節操のないものに何處に存在の意氣があるでせう。然しこれが貴女にお分りにならない事なのです。いくら説明してもお分りにならなかつたのです。『あゝさうですか』と云ふお返事丈けで。ですから貴女は單に處女を破ると云ふ生理的出來事と半面思つて被入る。まあ此處はこれでもいゝとして――苦學生が學資の爲に車を引く事と同じだと被仰つて貞操を超越した樣な口吻をお洩らしになりました。處女を賣る事と車を引く事と同じたと云ふ皮想の見解を百歩讓つて肯くにしても貴女の自ら唱へて被入る事を貴女の心は裏切つて貴女を悶えさせて居るではありませんか。苦學生は毎日油汗と交換した金錢を眺めて滿足の笑みを投げて居ます。決して貴女の樣に泣きはしません。貴女の樣に悶えはしません。

貴女は二つの道を一時に渡らうとして彼方へ一足此方へ一足して被入る。然かもそんな藝當の不正當の事を何處かで承認しながら何とか人に喝采され樣として被入る。私は貴女の乞食根性と不正直を憐みます。何よりも貴女御自身に對して正直でない事を憐みます。郁ちやんがお宅へ伺つた時、貴女は『汝の敵を愛せよと云ふ事がありますから私は安田さんに進んで御面會を求めます。そして私の廣い心で安田さんを抱擁して了ひます。』と――敵呼ばゝりは笑はせますが――被仰り乍ら私に向つては『貴方はお強い方だ。神樣の樣な方

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だ。私は今日お目に懸つてほんとに教へられました』などと云ふ赤ん坊をなだめる様な人笑はせな事を並べたり、『あの私の書いた論文がそんな價値のないものなら何故生田先生――長江氏――が反響にお載せになつたのでせう、とか、私の様な弱いものが青鞜社に居ると云ふのが間違つて居るのですと云ふ様な女の腐つた様な愚痴を並べたり、過去の罪と現在の生存とを强ひて兩立させ様としたり殆ど貴女は私の前に迷ひ拔いて被入いました。貴方には貴女が何方へ行くのがさへ分つて居ないぢやありませんか。私は私が最後に申上げた『人間が生きると云ふ事は肉體の亡びる時にも用ひられるのですよ。私は貞操を賣らなければ死ぬと云ふ時なら立派に死にます。これが立派な生きる事なのです』と申上げた事も生きる道に付いて内的に何の理解を持つて被入らない貴女にはお分りにならなかつたと思ひます。それも無理からぬ事と存じますが只貴女は貴女自身をお育てになりたいとならば郁ちやんの様な小娘に數千言をお費しになる勞力をも少し眞面目に御自身の上にお注ぎになる筈です。人の同情をあさる爲に心血を碎く前に自分に確固たるものをお握みになる事にお務めになる筈です。

『私は云ひたい事を澤山用意して行つたのですがあゝ云ふ方には何を申ても分りませんから只尊敬さへして置けばいゝんですそれで喜んで居る方なんですから』と私にお逢ひにな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた後郁ちやんにお話しなすつたとか聞きましたが若し事實とすれば私の前にお座りになつた貴女とこのお言葉を考へ合はせてその卑怯さに愛想が盡きて猶さら貴女の御一文に眞面目にお答へするのが馬鹿らしくなりました。

貴女は三ヶ月間程の間に必ず殼を破るから見て居る樣にとお別れの時被仰いました。貴女が堂々たる御論旨を提げてお立ちになる時私は何時でも喜んでその矢面に立ちます。今は貴女の御主張には――御主張の筋が何處にあるのかさへ分りませんが――少しの尊敬も敬意も持ち得ないのですから失禮します。

只終りに私が生田さんに申たいのは私の保護の下に居た郁ちやんが或事情の爲め實生活に多く經驗を持つて被入貴女に自活の道をお尋ねに私に無斷でお宅へ伺つた時。『安田さんに對するいきさつからしても貴女には興味を以て私が御世話したいと思ふ』と被仰つたと云ふ一事です。若しこれが事實ならば私は貴女が筆を捨てゝ台處の隅にお隱れになる事を喜びます。海のものとも山のものとも知れないまだ十七の歳の明けた許りの小娘の生涯の第一歩を私に對するいきさつの興味から左右するとは誠意のなさに呆れ果てます。そして貴方は其まゝお氣が付かずパンを得る道をお與へになれば貴女の型にはまつ

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た貴女の同情者になると思つて被入るらしい。誠意のない文筆は無智の人間をどれ程毒するか考へて見て下さい。否その前に貴女に誠意がなかつたと云ふ事を充分にお考へになる必要があるでせう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

野蜂の夢——シユライネル

母は開け放した窓の側に坐つて居ました。剌毬花の木（Acacia-tree）の下に遊んで居る子供等の騒ぐ聲や、午後の暑い空氣が其の窓を通して流れ込んで來ました。黄色い花粉を足に付けた野蜂が、始終ブーン／＼云ひながら窓を出たり這入つたり、剌毬花の木をぐる／＼廻つたりしてゐました。彼女は低い椅子に腰を下しテーブルに向つて繕ひ物をして居るのでした。彼女はテーブルの上の大きい籃から長い靴下を取り出しましたがそれは彼の女の膝の上にある本を半分計り覆ひました。彼女はもぐつたり、出たりする針の先きを見詰めて居ましたが何時の間にか彼女の耳に單調な蜂の唸り聲と子供等の聲とが妙にこんがらかつて來て、針持つ手はだん／＼おそく動くやうになりました。足の長い蜜を造る事をしない、胡蜂のやうな奴が彼女の頭のまわりへだん／＼近づいて來ました。彼女はいよ／＼睡くなつて靴下を持つたまゝ、テーブルの縁に手をかけて突伏して了ひました。外の子供等の聲は今は夢の様に近くなつたり遠くなつたりしてゐましたが其のうちに何にも聞へな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

くなりました。けれども彼女は彼女の胎内にやどる九人目の子供を知覺して居ました。頭のまわりへ飛んで來た蜂を見ながら睡つた彼女は不思議な夢を見ました。

彼女の周圍を飛び廻つて居た幾疋かの蜂の體はだん〳〵長くのびて行つてとう〳〵人間になつてそして彼女のまわりをぐる〳〵廻り始めました。やがて其のうちの一疋が彼女に申ました。

『私が此の手であなたの横腹を觸つてあげませう。そうするとあなたの胎内に睡つて居る赤子は私のやうな人になります。』

『一體、あなたはどなたですか?。』

『私は健康(Health)です。私が觸つてあげた人は生涯疲勞や、苦痛を知らずに暮すでせう。其の人の色のいゝ血は始終血管の中を踊つてゐます。』

此の時外の蜂が健康を押しのけて

『いえ〳〵私が觸つてあげませう。私は富貴(Wealth)ですから私が觸つてやつた人は一生物質上の心配がありません。其の人は他人の血と汗を利用してゆたかに生活して行きます。其の人の慾望するものはどんなものでも必ず其の人の手に這入ります。其の人は生涯缺乏と云ふ事を知らないでせう。』

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と申ました。けれども母の胎内の子は鉛のやうに動かずに居ました。すると又他の一疋が『私が觸つて上げます。私は名譽（Fame）です。私は、私に觸られた人を、世間の人に崇められる高い位置へ連れて行きます。彼の名は彼が死んだ後ですら何世紀も〳〵の間世に響き渡るでせう。考へて御らんなさい、彼の名が何百年も〳〵忘れられないのですよ。』と言ひました。

母は落着いた呼吸を續けて睡むつて居ましたが彼女の夢で蜂は猶彼女に迫まつて來ました。此度は又他の蜂が

『私が其の子供を觸りませう。私は愛（Love）です。もしも私が其の子供を觸れば其の子は一生孤獨を感じる事はありません。もし彼が最も暗い闇の中に踏み迷ふた時、彼が彼自身の手を差しのばせば必ず他の人が其の手を握つて呉れます。もし又彼が逆境に陷る場合があるとすれば、其の時は必ず『あなたと私と二人で』と云ふて呉れる人があります。』と云ひ終つた時、胎の子供は幽かに震へました。けれども又別の蜂がせむやうに

『私に觸らして下さい。私は才能（Talent）です。今日迄に人間が成し遂げた事で私に出來ないものは何にもありません。私の觸つた人で軍人や政治家や哲學者や又政治學者になつたのが澤山ありますが彼等は皆成功して居ます。それから又開闢以來唯一人と云ふやう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な著者も私は出して居ます。ですから、もし、私が其の子供を觸つなら彼は失敗に悲しむやうな事は決してありません。』

と說きました。

蜂どもは其の尖細の手で母をさわりながら彼女の頭のまわりをぐる〳〵と飛び廻りました。此の時部屋のうす暗い處かち、頰のひどくこけた、大浪のやうに皺のよつた、淡黃の顏色をした老人が、痙攣的な微笑を口もとに浮べながら出て來ました。そして彼が手をのばすと母は思はず後ずさりして

『あなたは誰です。』

と叫びました。けれども老人は無言で居ました。彼女は彼の睫毛と睫毛の間を暫く見て居ましたがやがて

『あなは何を私の子供に與へますか？　健康ですか？。』

と尋ねました。老人は口を開いて

『私の觸る人は彼の血液の中に燃へるやうな狂熱を起します。其の熱は火のやうな勢ひで彼の血を舐め盡すでせう。其の熱は彼の生の苦しみが癒える時始めて癒ゆるでせう』

『あなたは富を與へるのですか？』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼は頭を振つて

『私の觸つた人が、もし黃金を拾ふとして屈むならば彼は其の瞬間に急に彼の頭上に一ツの光を見ます。で彼が仰向いて其の光を眺めて居ると、彼の一度摑んだ黃金は彼の指の間から滑り落ちます。或ひは又通りがゝりの人が彼の手から其れを奪つて行きます』

『あなたの仰有るのは名譽ですか？』

『イヤ、そうでない。私の觸つた人のためには、誰も見る事の出來ない指で、しるしを付けた道が沙の上に出來て居る。彼は其の道を進まなければならない。時とすると其の道は殆んど山の頂上迄登つて居るかと思ふと又急に谷間に下つてゐたりする。が彼は其の道を歩まねばならぬ。たとへ、外には誰も其の道を見るものはないけれども』

『それは愛ですか？』

『彼は愛を渴望します。けれども彼は其れを得ません。彼が手をのばして、彼の愛する者に、心を傾けやうとすると、其の時に、彼は遙か離れた地平線を沿ふてゆらぐ光を見ます。彼は其の方へ行かなければなりません。けれども彼の愛する者は彼と共には行かない。彼は一人で進まなければならないのだ。もしも彼が彼の燃へるやうな胸へ彼の愛する或る者を押し當てゝ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『此れは私のである。此れこそは私自身のものである』

と叫ぶならば其處に一ッの聲があつて

『棄てよ、棄てよ。其れは汝のものではない』

と云ひます。』

『それで彼は成功するでせうか？』

『彼は失敗します。もしも彼が他の人々と競爭するならば他の人々は必ず、彼を後へ殘して目的を達します。何故ならば不思議な聲が彼を呼び、不思議な光が彼を招きます。彼は其の光に隨ひ其の聲に耳傾けなければなりません。そして最も不可思議な事は、彼は燒ける沙の向ふに、他の人々には不毛な沙漠ばかり見ゆる處に、藍色の海を見ます。其の海の上には、始終、日が輝いて居て水は燃へる紫水晶のやうです。そして海岸に打ち上げる水の泡は雪のやうに眞白です。それから其處の大きな陸の上にある山の頂上に、彼は燃て居るやうに光る黃金を見ます。』

『そして彼は其處へ達するのですか？』

と母は尋ねましたが彼は唯奇異な笑ひ方をして居ました。彼女は又た

『其れは現實ですか？』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と聞きました。

『現實とは何でせう?。』

彼は聞き返しました。彼女は彼の半分閉ぢた目を見て居ましたがやがて

『觸つて下さい。』

と申しました。彼は屈んで母の腹の胎兒の居る處に手をあて、ニッコリとしてさゝやきました。

けれども其の聲は低かつたゝめ母の耳に聞き取れたのは唯これだけでした。

『我には理想である事が汝には現實である。此れが則ち汝に與へらるゝ賜なるぞ。』

此の時胎兒は震へました。母は未だ睡つて居ましたが彼女の長い夢は消へました。胎兒も亦夢を見ました。彼は其の未だ一度も日を見た事のない目に、未だ其の固まつてゐない頭腦に、或る光を感じました。其れは勿論其の子供が未だ見た事のない光です。又恐らくは此の子供が生涯見ないかも知れない光です。其れは何處かに存在して居る光なのです。

　そして、其の子供は既でに其の賜を持つたのでした。理想が其の子供には現實でありました。(をはり)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

遙か彼方の世界で

遙か彼方の數ある星の中に一ツの星世界があります。そして其處には此の私達の世界には無い事があります。

其の世界に一人の男と女がありましたが彼等は二人とも同じ仕事をするのでした。そして二人は相並んで幾日も〳〵歩いてゐました。彼等は親友であつたのでした。此れは此の私達の世界にも折々ある事柄です。

けれども、其の星世界の或る處に一ツの生繁つた森林があつて其の中に一ツの祠があります。樹々の枝は密に差しかはしてゐて夏の日の光も決して其處へは通しません。晝は全く靜で、其の靜さを破る何物も其處にはありません。が夜になつて星がきら〳〵と輝く時或は又月の光が樹々の上を滑り、其の下がひツそりしてゐる時、もしも人が、一人ひそかに忍んで行つて祠の石の祭壇の前の階段に跪き。そして其の階段迄血が流れる程傷づいた胸を押し開いて祈をすると其の願ひがたとへどんな事であつても必ず許されるのでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此れが則ち前にも云つた通り其の遙か遠い世界にだけあつて此の世界の私達の知らない事なのです。

さて、其處に前に話した男と女が住んで居ましたが其の女は常に友なる男の幸福のみを願ふて居りました。或る晩、月が輝いて凡ての樹の葉はキラメキ、海の浪は一面に銀を流したやうに見ゆる時、女は獨り、こツそりと其の森林の中へ身を沒しました。森が未だ淺い處では、時々彼女の足許の枯れた木の葉の上に僅かの月の光片が落ちましたが、だん〳〵深く進んで行きますと彼女の頭の上の繁つた木の枝は相互ひにかたく結ぼれてゐて全く眞暗でした。遂に彼女は祠のある處迄來ました。そして其の祭壇の前へ跪いて祈りました。けれども祠からは何の答へもありません。で彼女は自分の胸を開き傍にあつた、やじりのやうな石を取つて我と我が胸を切りました。血はだら〳〵と石の階段迄したゝりました。

此の時聲があつて

『何を求むるか?。』

と申ました。で彼女は答へました。

『何物にも替へがたき一人の男が私にあります。どうぞ、凡ての幸ひの內の最も幸ひなものを彼に授けて下さい。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『其れは何にか?。』

『それは私にも分りませんが私は、最も彼のためになるものを彼に持したいのです。』

『宜しい。其の願ひは聞き届けた。』

と其の聲は申ました。女は立ち上りました。そして傷づいた胸を着物で覆ひ其處をかたく手で押へながら彼女は其の森林を走り出ました。枯れた木の葉が彼女の足の下で飛び散りました。森から出ると月の光が微風と鎔け合つてゐて、海岸の砂はキラ〳〵光つてゐました。彼女は平らな海岸を沿ふて走りましたが海の上に何にか動いてゐるのを見たので急に立ち止りました。彼女が手をかざしてよく眺めますと其れは小舟でした。其は靜かに、速かに、月光を浴びた水の上を沖の方へ滑つて行きました。そして其の舟の中に人が一人立つてゐました。月の光では其の顏は分りませんけれども其の姿を彼女はよく知つて居ます。舟は、すん〳〵進んで行きましたが、誰も漕いでは居ないやうに見へました。舟は既でに海岸から遠く離れて彼女には明瞭（はつきり）見へないけれども立つて居る彼の外に船尾の方に坐つて居る人が一人あるやうにも見えました。だん〳〵遠く舟は行つてしまいます。彼女は唯海岸を走る計りで少しも舟に近くなる事は出來ません。今迄彼女がかたく押へて居た着物は、彼女が思はず兩手を海の方へのばしたので、ヒラ〳〵風にひるがへり、彼女の長い髮は月の光

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に輝らされてゐます。此の時何處からか聲があつて
『どうしたのだ。』
とさゝやきました。彼女は
『私は私の血で、凡ての贈物の内の最も善い贈物を買つて、來ました。そして其れを私の愛する彼に與へやうと思つて此處迄來て見れば彼は私を去つて行つてしまいます！。』
と絶叫致しました。
其の聲は優しく
『お前の祈は聞き屆けられて、そして彼は既に其れを持つて居るのだ。』
『其れは又何です？。』
『彼がお前を去る事だ。』
女は石像のやうに立ちました。舟は遥か沖の方の月の光の向ふに見えなくなりました
聲は又靜に
『お前は其れで滿足か？。』
と申ました。
『滿足です。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と女は答へました。潮は彼女の足許迄寄つて來て又靜かに引いて行きました。（終り）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

立つて居たと思ふた

私は天國の神の玉座の前に立つて居たと思ひました。
そして何のために來たかと神樣に問はれて、私は、私の兄弟なる男を告訴に來た、と答へました。
『彼が何をしたのか?。』
と問ひ返へされて
『彼は私の姉妹なる女を連れ出して彼女を打擲し、傷け、そして往來へ衝き出しました。彼女は今其處に仆れて居ます。で彼の手は血で赤く汚れて了ひました。ですから、私は、神樣が彼に賜ひし王權をねうちなき彼の手から奪ひとつてそして女なる私に御授けあるやう御願ひに參りました。』
と云つて私は兩手を神樣の前へ擴げました。
『お前の手は淸いが…………、其の裾を少しあげて見なさい。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と神様は仰有りました。私は裾をあげました。そして見ると私の足はまるで葡萄酒の中でも歩いて來たやうに血で赤く染つて居ました。

『それはどうしたのだ?。』

『愛する神様、地球上の往來は實に至る處汚れて居ます。もしも私が心して其處を歩きませんなら私の上着は汚點だらけになります。けれども私の此の眞白な着物を御らんになつても御分りになりませう。私は道を拾ひ〳〵歩ひて參りました。』

『何の上を歩ひたのだ?。』

私は返す言葉がありませんので無言のまゝ裾を下し、頭からマントを被つて、そツと引き下つて參りました。私は天の使達に顔を見られるのを恐れたのです。

後に、もう一度私は天國の門に立ちましたが此度は一人の姉妹を連れて行つたのでした。私達はお互ひにかたく體をくツつけて居ました。私達は大へん疲れて居たのです。そして大きな門を眺めて居ましたがやがて天の使が其の門を開けて呉れました。私達の着物には泥がついてゐましたが、それでも私達は門の中へ這入り、大理石の床の上を歩みそして大きな玉座へと近づいて行きました。此の時天の使は私達二人を分けて彼女を階段の上へ私を其の下へ置きそして申ました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『此の女は此の前來た時床の上へ血の足跡をのこして行つたので、私達は其を私達の涙で洗ひ清めなければならなかつた。だから此度は此の女だけ上へあげないやうにしなければならない。』

けれども私の姉妹が私の方を振り返つて見ながら手をのばして居りますから私はあがつて行つて彼女と並んで立ちました。決して罪を犯した事もなければ又惱みと云ふ事なぞを知らない天の使達の側をたへず彼方此方と歩ひて居りました。が彼等があまり光り輝いて居りますので私は、もし私一人であつて連がなかつたならどんな心細い事であろうかと思ひました。

神樣はもう一度私に何のために來たのかと御尋ねになりました。私は私の姉妹がようく神樣に見へるやうに彼女を少し前へ押しやりました

『今日は二人連れ立つて何用か?。』

と神樣は仰有りました。で私は

『彼女が往來に仆れて居りますと人々は彼女を蹈んで通り過ぎて行きます。ですから私は彼女の側へ我から仆れて私の肩へ彼女の手をかけさせ、彼女を立たせ、そして一所に起きあがりました。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と申ました。すると神様は
『それでお前達は誰を訴へに來たか?。』
とお聞きになりました。
『私達は今誰をも訴へに來たのではありません。』
と私が答へますと神様は顔を前へ出して
『それではお前達の求むるものは何か?。』
と仰有りました。私の連は私の手を引つぱつて、私に私達の來た理由を話して呉れと云ふ事を知らせました。で私は口を開きました。
『神様は私達の兄弟なる男に、彼が悟る事が出來るやうな御言葉を下さいまして、そして其の使に私達をたてゝ下さいますやう御願ひ致します。』
『よろしい。言つてやろう。』
『何と申ませうか?。』
『其はお前の心の上に書いてある。其を行つて言ふがよい。』
私達を玉座を後にして歩き出しました。天の使達は門口迄私達と一所に來ました。
そして其の内の一人が申ました

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あ、そう、此の女達の、衣服は美しいね。』
すると他の天の使が
『彼女達が此處へ入つて來た時には彼女達の衣服は泥まみれのやうであつたが、今は黄金のやうに輝いて居る。』
と云ふのを聞いてもう一人が
『靜かに！　其は彼女達の顔に現れた光です。』
私達は其を聞きながして兄弟の居る方へ下りて行きました。（をはり）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

快樂の園

彼女は香しい匂が豐にする花床の中を歩いて居ました。そして兩手に一杯美しい花を摘みあつめました。此の時、白い、はつきりした顏の義務（Duty）が來て彼女を眺めました。で彼女は摘むのは止めましたが未だ笑ひながら、花を兩手に持つたまゝ種々の花の咲いた中を歩いて居ました。すると又義務が靜かな白い顏して現れて來て彼女を眺めました。けれども彼女は彼から目をそらせてしまいました。が遂に彼女は彼の顏を見て、持つて居たうちの一ばん美しい花を捨てました。そして靜かに彼方へ歩いて行きました。

處が又彼は彼女の側へ來て立ちましたので彼女は思はず悲しみの聲を發しました。そして頭を低くたれて門の方へ行きました。けれども彼女が、日光のなかに輝く花の顏を振返つて見た時に彼女は心のもだへに堪へきれず泣き出しました。彼女が立ち去つた後で園の門は永久に閉されました。が彼女は未だ、手に、沙漠のやうな淋しい處へ來ても、馥郁として薫る蕾をいくつか持つて居ました。義務は彼女の後を逐ふて行きました。そしても

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

う一度彼はその静かな、白い、死んだやうな顔して彼女の前に立ちました。彼女は何のために彼が來たかを知つて居ます。で彼女は、指をひろげて、命を愛して居た、花を地上に落しました。其れを捨てゝ行かなければならない彼女の目は乾いてヅキ〳〵痛みました。最後に又義務が來ました。彼女は兩手をひろげて何にも持つてゐない事を明らかにしましたけれども、彼は未だ彼女を見詰めて居ます。彼女は餘儀なく自分の胸をあけて其處に隱してあつた一ツの小さい花を取出し砂の上に置きました。此度こそ彼女はもう何にも持つて居ませんでした。

彼女はフラ〳〵と彷徨ふて行きました。彼女の周圍に灰色の砂煙が舞ひ上りました。

（終り）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜社詠草

よし子

けふもまたこゝろみられぬ讐敵にストーヴのそばに懺悔してあり。

池の面にちら〱とちる月かげをしばし見入りて涙ぐみけり。

君はまたひとりおもひをしてあればそと近よりてかろく脊をうつ。

うべなりき戀はくすしきものなれば甘(あま)しとも見し苦しとも見し。

枝折戸をそつと開ければ君ならでピーターなりきいたづら犬(こ)かな。

朝まだき竹刀(しなひ)の音す隣なる中學校の寒稽古かな。

たそがれの黄金色なる西の空に黒き小鳥のむれつゝはしる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しゝまなる黄昏のもとうなだればそこはかとなき涙ながるゝ。
とはにすまん國もしあらばわれゆかん現實の世にいとまつげこん。
花咲くと散ると此の世のことみなはなほすてがたくなつかしきかな。
夜な／＼にあやしきもののほゆるごと港の汽笛遠ひゞくなり。
大海のかなへの底に似たるかなわが熱病のふしどの下は。
ひやけき寢覺の床にしみ／″＼と血潮の凍る音をきくかな。
若き日は遂にこの身を去りぬべしこゝろさりにし君のごとくに。
よろこびに心悸めくたそがれは遂にふたたびわれに來ぬかも。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人をのむ浮世の灘のたゞ中にしばしいこひて戀をもとむる。
わが戀をプラトニクとぞ人はいふさもあらばあれさもあらばあれ。
うてばなるうたねばならぬこの頃の君がこゝろのあきたらぬかな。
われをにくめりわれも亦君をにくめり何ぞかなしき戀や。
なさけをばあらぬかたにとはきちがふ心うたてき耳しひの人。

有田勢伊

秋の風稻田を渡り水越えて松が枝ならし我家に入りぬ。
紫の牧場に遊ぶ小羊の如き雲散る秋晴れの空。
寂しさのひたよす山のひとつ家に冬來る夕べひとり座しゐぬ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

生そばやの紅提灯ぞうら悲し潮鳴り高き島の冬の夜。

雪解水雨垂る音をさびしとし女は泣きぬ病の床に。

悪しきくせ多くつくりぬわれ病みてされど心を少しきざみぬ。

粧ひして鏡を見るを一つあるなぐさめとするさびしき身なれ。

六月の花を蒐めて羅をまとひ生きてあれどもなほあぢきなし。

君が瞳の口づけにより此胸に生ひにける戀いかゞ育てん。

萩折るとまつはる葛を剪り捨つる心强さに戀をするか那。

我命戀人の名をも惜しとせずひたに護らん女の矜り

一ぱいの湯の味——牧野君江

閉め切つた障子の硝子に黝黒な檜の葉と白々しい空が氷るやうにうつつた。空の色はまう日暮に近かつた。家の中にはもの音一つせぬ靜かさである。折々風かあたつて硝子がふるへて鳴つた。

よし子は室の中に少しかたよせた炬燵にあたりながら、掛蒲團に顔を伏せて睡るともない苦しい睡りの中に夢ばかり見てゐた。

そして幾度ともなく、なんと云ふことも出來ないやうな深い恐怖に襲はれて、叫ばうとしてふと氣がつくと、思ひ返すやうにしてはまたそのまゝ苦しい恐しい睡の中へ落ちて行くより仕方がなかつた。睡つてゐながら何もかもよく解つてゐた。熱のあるらしい體には背筋に水をかけるやうな寒氣を覺えてゐた

廊下の開き戸が開いて人の氣配がした時、客として他人の家に來てゐるかうした自分の様子を氣遣つて、この家の人達が先刻から二度ばかりそつと見に來たのを知つてゐたので、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今度もそれかとよし子は思つた。

今、自分の體の方にしのびやかに寄つて來る跫は、直後に來てつと立止まつた。刹那、よの子はたちまち、それは啓次郎が來たのだと思ひ更へてしまつた。よし子は赫とした。

もうどうすることも出來ない、兎れられない、よし子はひどく體がふるへた。すぐ今朝家を出る時の男の顏を思ひ出した。憤怒と憂悶とに靑ざめて口元の痙攣したその時の顏はよし子に再び見るに堪えられない、見なければならぬものであつたならば見ると同時に、自分の呼吸は止ると思つた。よし子はなほもひどく體をふるはせて、ひしと蒲團に面をおしつけた。

どうしても兎ることは出來ぬと思ひ入れると、慘虐な力の前にうち碎かれ、引き裂かれる骨や肉のもろい命の痛々しさ、傷さにさめざめと泣かれた。淚は湯のやうに止め度もなく湧いた。自分にはその淚は、最後の今となつても男がことの初めから今この終りまで、一意自分に求めてゐる男へ對する自分の悔恨でも謝罪でもない。たゞ只管にか弱いもろい吾命に對する最期の哀憐である。よし子は思ひつめては泣きに泣いた。

そしてやつと今こゝに啓次郎が來る筈はなく夢を見てゐたのであると氣がついて、顏を上げても淚は矢張ポロポロ落ちて來た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

懐手をして立ち上ると、烈しい皷動が掌から傳るやうに總身に響いた。身のまはりを見廻すと、迫つて來た夕闇の中に何故とも來る所を知らぬ漠然とした恐怖に襲はれて、立ちすくんでしまつた。

いつか次の間の室には電燈がついて、間の障子の紙にうす黄色い灯かげがうつつてゐた。よし子は晝少し前に出た切り、かうして來てゐる自分を家に獨り殘して、灯ともし頃の今となつても歸つて來ぬ友達のことに漸く氣がついた。くらがりを着ものを着なほさうとして手さぐりに帶を解かうとして腕をうしろへ廻す拍子に、背骨にもの倦い痛みを感じた。男の足に蹴られた所であつた。

次の間室に出て渇を覺えたよし子は、火鉢の前に座つて猫板の上に飲みすてられた茶碗に湯を注がうとすると、手に持つた信樂の茶碗がぶる〳〵とふるへた。

茶碗に立ち昇る湯氣を見つめて、かうまで恐れ戰く自分は何のためかと、はじめてかへりみた。何をそんなに恐れてゐる自分なのか、男の暴虐が何處まで行くものであつても、行きつめた末は何であるか、自分は强いてもさう思はなければうそである。自分のもろい肉體が敢へなく滅びて行くのを殺戮の拳を振り擧げて見てゐれば男はそれでよいのである。

自分はそれを恐れてはならぬ。その暴虐な男の腕の下に、絶たれやうとするいきの緒のその最期の一吸一吐までにも、自分の心に育まれてゐる男に對する愛を強く大きなものにしやうとする努力を忘れてはならぬ。さうでなければ自分のすべてはうそである。

よし子は茶椀をとり上げて湯をのんだ。味氣ない一杯の湯は不快に舌の上を流れて、昨夜からまだ何一つ入れない腹の中へグヾと音して通つた。常から茶を飲まないことにしてるよし子が、吾家の火鉢の前で好んで飲む湯の味を思ひ出してる時、一ぱいの湯の味でさへもが、ふり切つては行けないわが生活の中實になつてゐたのであつた。

口から離した茶椀の椽にうす血がついた。今曉啓次郎が自分を呼び覺して二言三言いひ爭つた時、最初に「殺してやる」といふのと同時に男のふり上げた拳が勢でかすつて唇が切れたことを思ひ出した。

友だちの歸りを待たずに、よし子は友だちの家を出た。自分の顏を見たまゝ、何一つ自分の口から聞かうともせず、吾要用のため出て行つた、そうして今自分が歸つて行くまで顏を見せない友だちのかうした仕打ちは、初めから何もかも呑み込んでゐたのかのやうによし子に氣安く思はせた。一つにはそれがよし子の「家へ歸りたい」といふ心持をこだわりなしにつのらせたのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

晴れた寒空には星屑がちらばつてゐた。通りに出ると、よし子は一層足を早めて、やゝ明るい灯の中を潜るやうに歩いた。乾き切つた街上には、容れ物の形のまゝにうち捨てられた氷塊が、解けずに光つてゐた。

歸つて見ると、少年の吉見が獨り灯の下で教科書を讀んでゐた、よし子を見ると驚いて立ら上つたが、また座つてお辭儀をした。それからよし子が座る所に座蒲團を敷いたりなどした。よし子はそれに座らうともせず、一日明けゐたわが家の樣をなつかしく見廻した。寢腐された息に籠められた中に、夜具をふみしだいて、壞された器具を、うちまけた淺ましい今朝出て行く時の室の有樣を思ひうかべた。見ればそんなものはきれいに片付いてゐた。怒にまかせて男が引き裂いた二人の着物も什末をして、みだれ箱がそこの壁の下に置かれてあつた。よし子は擴げて見て繕はれてないその帛の裂け目を見ると、男の狂暴な性を悲しまずにゐられなかつた。

下女が來て啓次郎の居ぬことを告げた。

「夕方一度お歸りになりましたが、すぐまたお出かけになりました。」

「御飯は。」

「は、朝から一度も召上りませんので。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

下女は氣の毒さうによし子を見た。

よし子は輕い頭痛を覺えた。食事をしたり湯に浴つたりしてる間も始終さうであつた。啓次郎が今夜とても歸つて來さうに思はれなかつたので、よし子は寢ることにした。體が暖ると體の何處ともなしに、だる痛さを覺えて、それがもの憂くて睡られなかつた。漸くうと〳〵しかけると、耳のそばで吾名をよぶ聲がして呼び覺ますやうで疎しかつた。覺めると、今曉の事が思ひ出されるのであつた。

「およし、およし、起きないか。」

「どうしたんですの。」

「どうもせん起きたらいゝのだ。」

「……………………。」

「起したら起きたらいゝぢやないか、話しがある。」

「夜があけてからにしませうよ。」よし子はやつと鮮明な意識になつてこれだけ答へた。

「何だと、俺は宵から一睡もしないのだぞ。」

よし子は意外な鋭い男の言葉に驚かされた。云ひつのつて來るまゝに男の調子はだんだん險しくなつて、はては昂奮の極、聲は咽喉で苦しさうに壓されてしまつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「どうしても謝罪らないのか、そいちやいゝ善麿の旅先にゐる所をいへ、手紙を出せ、」

「そんなこと知りません、手紙なんか來やしませんよ。」

「何だ知らぬ、よし俺が探し出して善麿君を殺してしまつてやる。」

よし子は凄じい啓次郎の形相を思ひ浮べ浮べて、蘇つて來た恐怖の中に、さへた眼を見開いてゐたが、いつか憂はしいその心持のまゝに寢入つてしまつた。

次に眼を覺したのは、下女が啓次郎から電話して來たのを傳へた時であつた。啓次郎はよし子の歸つてゐるかどうかを問ふて、自行も今から歸つて行くといふのであつた。

よし子は床を出ると着物を更へて歸つて來る人を待つた。

風の音は漸く和んで行つたが、夜が更けるにつれてひどく寒氣の身にこたへるのを感じた。まもなく歸つて來た。よし子は思はず誰よりも先に出て行つて潜戸を開けた、男はそれがよし子であるのを見ると、ぎよつとしたようであつたが、默つて這入つてしまつた。そしてマントと帽子を疊に投りだして、よし子があとじまりをして上つて來るのを待つて奥へ這入つた。よし子は仕方なしに一緒に男の居間へついて行つた。

「炭を入れてくれ。」 男は室へ這入ると。いきなり低い聲でかう云つた。

よし子は默つて壁の下の小さな暖爐に石炭を入れた。そして少し離れて卓子に添つて男

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の方へ歩みよる間、男は一度もよし子の顏を見なかつた。よし子が小さな椅子を進んで再び暖爐の傍に來ると、啓次郎もつと寄つて來て、よし子をおし除けるやうにして、焚口をあけて煙草に火をつけた。そしてそのまゝそこに立ちはだかつた。よし子は初めて男の顏を見た。

啓次郎は今日出てゐる間に、頭髮をきれいに角刈にして來てゐた。そして一緒に髯を剃り落してしまつてゐる。今日といふ日に態とらしく何故そんなことをしたのか解らなかつた。よし子は自分と棲すやうになつてからも啓次郎が生せば美しいその鼻下の髯を生やしたり、落したり、幾度したか、そんなことばかりして居る稚氣な心持を可笑しく思つた。

啓次郎も氣になるらしく、急に剃りあとの青ずんだ口のまわりを淋しく撫でまわした。

二人は默つてゐた。暖爐はしきりに音をたてゝ燃えた。やゝ長い時間の沈默は、今曉からの忌しい苦しい一日の經過をかいりみることによつて各自の心の上に、憂鬱な曇を落して行つた。

男の方から口を切つた

「姉さんのところへ行つたか。」

「いゝえ。」

「何故行かなかつた。」男の聲は沈んでゐた。

「行く要もありませんから。」

「何？　それぢや何處にゐたんだ。」

「森のところにゐましたわ。」

「えゝ？　うむ、さうか、森のところに汝は要があつたんだな。」男は湧き上る憤怒を無理に壓へやうとして複雜な顏色をした。

「私があなたとのことを、あの人たちに知られたり、そんな馬鹿なことをしないといふことはあなたにも解るでせうね」

「うむ」男の重い呻くやうな聲は更けた室の中に凄氣を漲らすやうであつた。半面に灯を受けた、青ざめた男の顏の沈鬱な表情はよし子の胸に、痛い悲しみを起させた。

よし子はぢつと見つめてゐると男の顏に自分の顏をおしつけて、泣き入りたつやうなもの淋しさに胸がつまつた。またしばらく二人は何も云はなかつた。

啓次郎は立ち上つてしづかに歩きだした。そして向側の長椅子に歩みよつて身を橫へた。よし子にはそれがいかにも身のおきどころがないといふやうに見えた。

「わたしを殺して下さい。」よし子は突然いひ放つた、がたちまち襲いかゝる恐怖に總身

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をふるはせた。
「汝は殺さないよ、そんなことでは足りぬ。」
男は天井を見つめながら云つた。
「汝は何故歸つて來たのだ。」よし子は泣かずにはゐられなかつた。
「何故歸つて來たのだ、返事をしないか。」
「あなたに逢ふと思つて。」よし子は答へた。
「俺は別れることにしやう、とにかくね。」
女の涙を見ると啓次郎はだん〳〵平靜に返つて行つた。
「いやです、いやです。」よし子は押し出されるやうに云ひつゞけた。男はそれには返事をしなかつた。

よし子は暖爐の風穴から、ちらちら見える紅焔を見つめてゐると、快く暖つた室内の空氣に、男の長い深い呼吸の音が靜かに聞えた。よし子は毛布をとつて來て男の體を包んだ。男は少し唇をあけて靜かな樂さうな睡りを續けてゐた。よし子はその顏をなつかしくぢつと見入つてゐた。そのどこにも憂悶や憤怒や狂暴の影を見ることは出來なかつた。よし子

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はもの丶音を立てぬやうにして暖爐に炭を注いだ。それからいつもするやうに、靑色の絹で電燈を包んだ。室の中は一様に、壁も襖も、卓上の白紙も、椅子の被も、それから男の顏を靜安な靑色にうすく彩られた。（完）

大正四年一月

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ソニヤ・コヴァレフスキィの傳

—野上彌生子譯

第十章　ありし事及びあるべかりし事

ソニヤがこの寧ろ風變りな家庭にやつと落着いたかと思ふと、再び露西亞に呼ばれました。冬のさ中にヘルシングフォース(フィンランド)まで汽船で行つて、それから危篤に迫まつてゐるお姉さんのためにセント・ピエテルブルグまで汽車　行かなければならないのであります。

こんな場合には彼女は怖ろしいと云ふ事をも知らなければ、又どんな困難をも意に介しませんでした。彼女はお姉さんには身を打ちはめてゐたのでありました。而してお姉さんのためなら、何處までも犠牲になる氣でゐました。

二月の留守の間、彼女はその娘を私に預けて行きました。

この時の手紙は一本しか取つてありません。それにはその年のクリスマスを彼女が如何

に悲しく過ごしたと云ふ事を見せてゐます。

一八八六年、十月十八日

セント・ピエテルブルグにて

「Dear Ann Charlotte,——私は昨夜此處へ着きました。今日はほんの一二行しか書けません。姉は非道く惡うございます。最も醫師は四五日前よりはずつとよろしいのだとは申すのですが、こんな長い、苦しい、何もかも滅し盡すような病氣以上に殘酷なものが何かありませうか。彼女は死の苦しみをしてゐます。眠る事も出來なければ、正しく呼吸する事もなりません……私はどの位ゐ長く逗留しなければならないか分らないのです。ファウフィ（彼女の娘）と仕事のことを非道く戀しがつてゐます。今度の旅行は至極面倒で、のろ〳〵してゐました。——皆さんをなつかしく思ひやりつゝ。あなたの忠實なる友。ソニヤ」

永い間、日夜お姉さんの病床で斯うして日を送つてゐるうちに、彼女は自づと樣々の事を思ひ廻らしました。物事がどんな風になつて來たかと云ふ事と、どんな風になるべきであつたかと云ふ事を思つたのであります。彼女はかの黃金の夢を追想しました。その夢を持つて二人の姉妹、二人ながら若く、器量もよく、高い才能を持つてゐたのが人生に足を

出したのでありました。而してその二人に取つては、豐富でもあり、多事でもあつたとは云つても、豫想した幸福からは、如何にも小つぽけな人生しか出て來なかつた事を思ひました。彼女の胸の内奥には、今尙ほ失はれたる希望に就いて燃え立つ感慨がありました。

もし二人が二人とも、正しく致命傷的な失錯をしなかつたなら、あらゆる事がどんなに相違してゐたかも知れないのだ、とソニヤは我れと我身に語りました。

この回想から、二つの異なつた途に於ける同一の人の歷史を語ろうとする、二つの並行線をなした小說を書く氣になりました。その小說は凡ての青春の可能性を持つて、人生の重大な轉機に這入つて行く若者の曉を描出する積りでありました。一方の小說には彼等のなした撰擇の結果を示めし、も一つの方にはもしその反對を撰んだならどう云ふ事になつたゞろうかを示めすのでありました。

私達の間で誰か後悔すべき過つた步み方をしなかつたゞろらうか。而して自分の生涯を再び初めから生き直せるような時があればいゝとは願はなかつたゞろか、と云ふ事をソニヤは論じたのでありました。彼女が自分には出來そうもなかつたけれども、もしやれる技倆があるなら、小說にし度いと望んだのは、此祈願と夢でありました。そんな譯でストッホルムに歸つて來た時にはその新らたな思想に熱中してゐました。彼女は私を誘ひ込んで

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それを合著にしようといたしました。

丁度その時には私は『表面的結婚』と云ふ題で新らたな小說に着手したところでありました。それは未婚の女達、樣々な理由のために自分自身の家を見出す機會のなかつたような、そんな人々の經歷の積りでありました。彼等の戀愛や結婚に就いての思想。及び彼等の生活を充たしてゐる趣味を書こうとしたのでありました。――つまりその趣味が種々な理想を受け入れるに從つて、ローマンスを持たなくなつた、そう云ふ凡ての人々のローマンスなのでありました。その小說はガルボルグの『男の人々』に相對したものにする積りでありました。彼はその小說に獨身男の同じような閱歷を書ゐたのでした。私は私と同時代に於ける未婚婦人の澤山な典型を集めて、もうその事に打ちかゝつてをりました。その時ソニヤが彼女の理想を持つて歸つたのであります。私の上に及ぼしたその影響は甚大なもので、直ぐ私自身の子供を捨てさせて、彼女のを取らせて仕舞ひました。私がその時分に書いた五本の手紙には、二人かどれほどこの仕事に熱中してゐたかが現はれてゐるでありませう。

一八八七年、二月二日

『……ソニヤと私は素破らしい計畫を建てました。二人は十幕の大きな脚本を書こう

としてゐます。――その脚本は二部になる筈で、一部が一晩かゝるでありませう。思想はソニヤのですが、それを仕上げるのは私であります。それは最も獨創的な觀念だと思ひます。一部には斯くあつたと云ふ事を描き、今一つにはあつたかも知れぬ事を描くのであります。最初の曲では凡ての人々が不幸であります。と云ふのは私共はこの人生では普通お互ひの幸福を邪魔するからであります。第二曲では同じ人物がずつと活氣づいてお互ひ同士助け合つてゐるらしく見えます。而して小さい共產主義の理想的な社會を構成つて、凡ての人々が幸福になつてゐます。この事はまだ誰にも云つてはありません。本統のところ私はソニヤの理想以上のものは知らないのです。私達は昨日初めてその話をしました。明日彼女は委しくその筋を話事になつてゐます。その上で私はその事柄が劇的に取り扱はれるものかどうかを見なければなりません。あなたは私がもう凡ての事を極めて仕舞つたのを多分お笑ひなさるでありませう。けれどもこれはいつもの私の流儀であります。私は何か觀念を捕へるや否や、それは私の目前に成長して、凡ての筋がまとまるのであります。それ故私は世界ぢゆうに響いて大成功をするような大傑作の合著を夢見てゐるので御座います。そのことでは私どもは全くの馬鹿であります。若しこれが成効しますと何もかも旨い都合になるでありませう。ソニヤは瑞典が世界に於ける一番小つぽけな狹量な國だと云ふ事を

忘れませうし、此處で自分の大事な幾年かを失くするのを悔まなくもなるでありませう。而して私は——さあ、私がぶさくさ不平を鳴らしてゐる事を皆んな忘れて仕舞ふでありませう——あなたは私達は子供の一幅對だと思つてゐらつしやるやうですわいえ。全くそうなんで御座いますよ。幸福な事には空想の領と申して地上の凡ての國よりかもずつと優秀なある場所が御座います。これが私達二人に開かれてゐるのであります。此處ではあらゆる人が最高に支配する事が出來ますし又、あらゆる事が私達の思ひ通りにやつて行けるので御座います……結句ソニヤの構想は劇としては取り扱はない事になるかも知れません。彼女は小說にする積りなのであります。けれども私は他の人の構想に依つて物を書く事は出來ません。小說は脚本以上にその作家と作物の間に切り離しの出來ない關係がありますのですから。

それから二月十日の手紙。

ソニヤは生涯の中にこの新らたな事件を呼び起した事を悅びきつてをります。彼女は男が自分の子供達の母なる人と何處までも戀をして行くわけが今はつきり飮み込めたと申してゐます。勿論私が母で御座います。その子供たちを生むのは私の役目になつてゐますのですから。而してソニヤはもう私を愛しきつてゐますから、私を見つめてゐるその喜びに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

輝いた目を見ますと嬉しくつて堪まりません。私達がどちらからも悦びあつてる事と云つたら、こんな二人の女友達はこれまでは迚もなかつた程で御座いますよ——私達は二人の女流合著者の文學上に於ける最初の例でなければならないのですから。

……………私はそうずん〳〵書いては行きませんでした。いつもの通り書き初める前には數月間一つの思想を胸の中で成長さして置かなければならないからであります。」

三月九日に私達は親しい仲間の人達に初めて二人の作物を讀んで聞かせました。この瞬間まで私達の悦びと幻影は絶えず擴がりつゝありました。私はこれ程までに悦びに輝やいてゐるソニヤを見たとは決して思ひませんでした。

けれども他の人々に讀んで聞かせてゐるのを聞くと、その缺點や、不行屆なところが皆んな分つてがつかりさせられました。而して二人の脚本は余り熱狂的な早さで書かれたのですから、此度ばも一度嚴密に改作を經なければなりませんでした。

その冬ぢゆうソニヤは自分の數學的の事に注意を向ける事が出來ませんでした。けれども Prix Bordin に關する競爭の期間が極められました。而してソニヤはその仕事に一生懸命打ちはまらなければならないのでありました。

ミッタッハ・レフラーはいくらかソニヤに對して責任を感じるし、且つ此懸賞を得る事は

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼女に取つては非常に大切な事かも知れないと思つてゐるのでありますから、訪ねて行つた度にその客室で縫ひ取りをしてゐる彼女を見出して失望してゐました。彼女は仕事に夢中になつてゐたのでありました。その針が機械的に這入つたり、出たりしてゐると同時に、その思想も迅速に働いて、それからそれの場面が彼女の心の幻影の前にそれ自身を現はすのでありました。彼女の針と私のペンの間でその場面は全く競爭でありました。而して私達は二つの場面が同じ結果に到着した事を發見すると大悅びをいたしました。それは二人の空想が違つた方に自分たちを連れて行つたのが分ると持ち上つて來る喧嘩でやつと償はれる程のものでありました。この前の脚本から二度目に書く時には、私は仕事をしてゐる間は書齋にソーニャの立ち入るのを禁じました。初めの部分に於ける二人のしつきりなしの合作は余りに私をかき亂し、刺戟しすぎるようになつたのでありました。私は全體に對する萬遍なき見解と、自分の性格の親しい熟知を失ひました。

私達の性格の親和力にも拘はらず、二人の製作の方法ではソーニャと私は反對でありました。彼女はアッス(『幸福に就いて煩悶』の中に於ける)の如くでありました。彼女は誰か自分と一緒にして呉れる人がなければ何事も作り出す事も出來ないし、何事をもその胸一杯で抱く事は出來ないのであります。凡ての彼女の數學上の仕事は、他人の感化の下で生

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

じたのであります。その講義すらミッタッハ●レフラーが列席してゐると知つた時のみが、よく述べられるのであります。

ソニヤ自身もよく冗談らしく彼女の周圍に對するこの從屬を承認しました。

アリスの中に彼女は彼女自らの性格を描出しました。ヒャルマーとの大事な場面（第一部、三幕）でアリスは申します。

『私が本統に愛してゐると感じた時、私はどんな人間であるか云つて見ませうか。私は全くアトラクションがないとは思へはしません。私を御覽なさい、私は綺麗でせう。ねえ。あなたが愛して下さるなら、私は——綺麗でない筈はありませんわ。私は善良でせう。ねえ。愛されてゐると私は善良そのものですわ。私は我儘ぢやないでせう。えゝ、私はちつとも我儘ぢやありません。だから外の人の事ばかり考えてゐるのですわ。』

アリスはチャールスがその一生を打ちはめた仕事を一緒にし度いと願ひながら、外部の事情のために彼が彼女から引き放されるようになつたので絶望してゐます。一つの重大な事の爲めには萬事を犧牲にすると云ふ事が彼女の絶體の主張であります。卽ち一つの自我、一つの職業、一つの愛に信實を留めようとするのであります。凡てこれがソニヤなのであります。繰り返して申しますれば。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第二部劇に於けるアリスを見ますと、チャーレスの屋根裏の部屋に住むべく、その人と一緒に働くために過去に就いての彼女の劇しい破壞、富と位置の犧牲、――それがソニヤであります。もし此幸福な撰擇が自分に殘されてあつたなら、彼女は夢想した通りに行つたでありませう。

こんな場面を描くには、彼女自身のペンの方が、私に出來る以上に、ずつと熱烈に、箇性的な色彩を與えたゞろう事を疑ひません。

ヘルハムラに於ける『人民の宮殿』、偉大なる勞働者協會に就いてのアリスの夢、彼女の言葉。

『もし私達が皆んな同じ教育を受け、同じ生活法をしてるとしたなら、物事がどうすつかり變化したゞろうかと思ひます。もし私達が皆んな平等の一つの大きな社會でしたら。』

これ等はソニヤ●コヴァレフスキィの夢、彼女自らの言葉ではありませんか。

その友達の一人は彼女が亡くなつた後、こんな事を私に話しました。いつでしたか彼女の良人が何か大成功の投機に依つて、自分は巨萬の富を作らなくてはならぬと思ふと云ふ事を電報で知らして來た時、彼女は直ぐと同住共產の家を建てる計畫をしました。

ある丁抹の作家は『幸福に對しての煩悶。』を語つて斯う云つてゐます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『私は數學的の嚴正を以つて愛の全能を確證してゐる此驚嘆すべき劇を愛好する事を白狀します。それは愛が人生の精髓である、たゞ愛のみがひとり人生の精髓であつて、愛が力を增し成長を與へ、我々をして我々の本務を盡くさしめるものであることを確證してゐます。』

これ等の言葉を讀んだ時、私がたゞ殘念に思つたことはそれほどまでよく自分の理解された悅びをソーニヤに與ふるには、その言葉は余り遲すぎたといふ事であります。

改作は初めて書くよりもずつと時日を要しました。それは夏の間私達が別れ〱になつた時までも、まだ出來上りませんでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小倉清三郎氏に――らいてう

「性的生活と婦人問題」を讀んで

「青鞜」十二月號であなたの「性的問題と婦人問題」といふのを讀みました、久しぶりであなたのお話を直接伺つてゐるやうな氣持がいたしました。

私は、それに就いて、特にその中の「男の戀愛と女の戀愛」と「同時に二人以上を戀しても可い場合」とに就いて私の感じたことを妥で少し申上げたいと思ひます。

まづ第一の方から申します。

私がエレン●ケイのあの言葉――女子にあつて戀愛は通常靈性から官能に進む、そして時々そこまで達しないこともある。これに反して男子にあつては通常官能から靈性に進み、時々その旅程を終らないことがある云々――を心の底から成程と思つたのは、勿論私自身の戀愛の上の經驗を基礎にして判斷したので、それはあなたの仰有る通りです、又エレン●ケイの謂ふところの「官能」は春的慾望を指し、「靈性」は愛を指すものだらうと仰有るのももしその愛とは春的慾望を交へないあの性愛の意ならばこれも別段異存ありません。

けれどあなたが戀愛に於けるこの相違を全然男女によつての相違でなく、男なり、女なりが既に異性を官能上から知つてゐるか否かに依つて來る相違であるとのみ斷定なさつてその證據としてまだ女に對して春的慾望の滿足を要求しやうといふ處まで進んでゐない男子が、年長の女によつて誘はれて、初めて春的慾望と其れの滿足とを經驗させられるといふやうな場合が澤山あるといふことを擧げてゐらつしやるのに對しては私はどうも十分の滿足を得られませんでした。まだそこに言はるべく、考へらるべき多くの餘地が殘つてゐやしないでせうか。

これとても勿論私自身の經驗を中心としての推論に過ぎませんが。

今、エレン●ケイが爰でいつた「戀愛」の意味はあなたがおとりになつたよりもつと抽象的といつては語弊があるやうですが、つまり人間の一生涯の中に幾度も經驗される個々の場合、例へばAなりBなりの異性を對象としてのある場合の戀愛を一つ〳〵切りはなしていふのでなく、人間の全生涯に亘る長き戀愛生活を一つの戀愛と見る時、この言葉はたとへ例外はあるとしてもこのまゝに肯定さるべきものではないでせうか。

又今一つ、この「戀愛」を個々の場合を指すものとしても、爰に「男女ともまだ異性を官能上から知らない場合」といふ一つの條件を加へるならば、この言葉は矢張りそのまゝ受

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

け容れられるものではないでせうか。私にはどうもそんなやうに思はれてなりません。から見る時、あなたがお擧げになつた既に男を官能上からよく知つてゐる年長の女がまだ女を知らない年少の男を誘ふ場合などは何の反證にもなりますまい。なぜなら、その女にしたところが、何も初めつから男を知つてゐたわけでは無論ありませんし、又初めつからさう云ふ要求ばかりをもつてゐた譯でもなく、却てかう云ふ女の背後には過去の長い戀愛生活の横はつてゐることが想像されます。ですからそれが矢張り靈性からはいつて、官能に進み、そして今發達のその階段にあるものだと考へてもさう無理もなささうに思はれます。

まだ官能の上から異性を知らない女子が、春的慾望を自身に始めて經驗するに至る迄には、性愛を經驗しはじめてから可成りの長年月を要するものでせう。尤もその長さは個人個人で大變に相違があるでせうけれど、でも男子に較べれば長い時がかゝると思はれます。

實際、異性に對して漠然たる憧憬や好奇心をもつてゐる處女が偶々その對象として一個の男子を得たとしても、そしてその男子に對して烈しい愛を感ずるやうになり、今やその愛の情熱が頂點に對し、己れの全生命を男の前に投げ出してゐるとしても、なほ春的な慾望の伴つてゐない場合が寧ろ多からうと思ひます。これは私の獨斷に過ぎないかも知れま

せんが、春的なものの表れるのは却つて一度高められた性愛の興奮が多少なり降り阪になつてから後ではないでせうか。私一個の經驗を言つても性愛を經驗してから所謂慾情（デザイア）と名づけるものの自分自身の中に表れてくる迄に五六年もかゝつて居ります。私は第一の戀に於ても、第二の戀に於てもさういふものに就いて全く何も知りませんでした。考へることも出來ない程、眞に思ひもよらぬことだつたのです。そして今私は自分の戀愛の中から春的な慾望の生じてきたことを知つてゐます。併しこれについてはつきりした意識がもてるやうになつたのは極めて最近の經驗に屬してゐます。

しかもかういふ經路は私一人の經驗ではなささうです。總ての婦人と斷定することは出來ますまいが、私がきくことの出來た範圍內の婦人は大抵かういふ經驗を通つてきてゐるやうに思はれます。

ところが男子の多くはかういふ婦人の戀愛の性質に就いて理解を有ちません。そして女子の性愛をすぐ春的なものだと誤り信じて、その愛情が女子にあつていまだそこまで發達してゐないにも拘はらず、早くも春的慾望の滿足を戀人に求めやうとします。この時、戀人はどういふ態度に出るでせうか、それは屹度拒絕です。この拒絕は處女は重じなければならぬとか、貞操は女の全生命であるとかいふやうな所謂道德の支配や考案を容れる余地

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もないほど自然に本能的に出るもので、それは丁度他日その戀愛がもつと發達した時、そして男子の要求を受け容れても差し支ないまでに總て準備せられた時、處女を捨てるのが自然で、本能であると同じだらうと思ひます。然るに女子のこの戀愛の性質を知らない男子は自分の戀人から拒絶されると、自分に對する女の愛そのものを疑ひ始めます。のみならず身を許されるといふことを女の愛情の證としてゐる普通の男子はこれをもつて女の愛情(その中に春的慾望を生ずる可能性が潛んでゐるのだのに)の全部を否定します。そのために折角女の心に一度生じた大きな戀愛も健全な、自然な成長發達を見ないで、多くは半途で折られたり、枯らされたりして仕舞ふやうな不幸なことになります。

斯くして女子の戀愛と男子の戀愛との相異のために、從つて、女子の戀愛に對する男子の無智と、(戀愛に於て普通の場合に女子は受動的で、男子は能動的な丈男子の無智の方が害が多い。)女子自身の無自覺のために大小の悲劇の演ぜられつゝあることに私は思はずにはゐられません。

ですから總てのことがとんちんかんに終つた私の過去の戀愛の經驗も、只あなたが仰有るやうな異性に對する經驗のあるなしの相違や、充分成熟してゐるゐないの相違の外に、矢張り女の戀愛と男の戀愛との發達の仕方の相違といふことも同時にあつたといふことが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

云はれるやうになほ私には考へられます。繰り返して言へば私が十分成熟してゐなかつたといふよりも寧ろ私の戀愛そのものが十分成熟してゐなかつたのでせう――エレン●ケイの所謂靈性から官能に進む迄に。

これはこの位にして次に今一つの方に移ります。「同時に二人以上を戀しても可い場合」に就いてあなたがお述べになつたところは。私とは大變考へが違つて居ります。道德問題といふやうなことになりますと、あなたと私との間には根本的な相違のあることが感じられます。第一道德とか、不道德とか罪惡とかいふことの觀念からして違つてゐるやうなのです。あなたの觀方や考へ方はどこまでも相對的です、又時としては外面的です、ここが科學者の觀方、考へ方なのかも知れませんけれど。そしてあなたは道德の標準を寧ろ外的なものに置かうとしてゐらつしやいます。併しそれは私には道德の標準とするには何の權威もない、殆ど兒戲に近いこととしか思はれないのです。もしこんな外的な標準に從ふのが善で、從はないのが惡といふのなら――さういふものが「道德」といふものならたとへ不道德だらうがどうだらうが私にとつてはどうでもいいことになります。そこに何も眞劍になつてこの行爲は罪惡か罪惡でないかなどゝ爭ふほど重大なものは含まれてゐるさうに思はれます。――これが道德といふことをもつと第一義的に見、どこまでも内部的に見、道

徳的判斷を絕對自我の上に於て下さうとする私とあなたとの意見の相容れない處なのです。これではあまり抽象的な言ひ方になりました。私はこれから一々に就いて少し申しておきませう。そして筆を擱きたいと思ひます。

女が同時に二人の男を愛するといふことが罪惡であるか無いかは無條件には決められないのは勿論のことです。けれどその條件とは男女の間の約束の結び方だとし、若しふたりが最初その愛を取交す時、「あなた以外の誰も愛しません」といふやうな約束を取交してあつたとすればそれは罪惡だと判斷されるのはあまり呑氣な、子供だましなお話ではないでせうか。人間の心は絕えず動いてゐます、變化してゐます、あなたも仰有る通り、「愛はどう變化して行くものやら解らぬ」のも、「意志をもつてどうする事も出來ない性質のもの」です、ですからその不變などを豫め誓はれる筈のものではありません。こんな誓はれない筈の無理な誓約を、しかもずつと過去の誓約を標準にして現在の生きてゐる行爲に善惡の判斷を下すのはどうも矢張り譯のわからぬ困つたことだと思ひます。もし一時の激情から、又は戀愛の性質に對する無智から曾て男に對してこんなことを誓つたのなら、今その自分の輕卒だつたこと、無智だつたことを男に詫びねばなりますまい。それは勿論のことでせう、けれどこれは過失です。たとへ過失はあつたとしても、それだから他の男を今になつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て愛するのは罪惡だとはどうして云はれませう。今又一歩讓つて此誓約がたとへ全體から見て、戀愛の自然にさう悖つたものでないとしても、今現に事實に於て、自分がすつかり變つてゐるならば、そしてどうしても其誓約が守れなくなつてゐるならば、今の自分の最早何の關係もない死んだ過去の自分のした誓約によつて現在の自分に制限を加へる必要はないでせう。過去に於てした誓約の價値よりも新に自分の中に現はれて來た新しい戀の事實の價値の方が現在の自分にとつてどれ程多くの價値あることか知れません。ですから過去に於ける誓約によつて現在の自分を否定する方が寧ろ罪惡だと云へる位でせう。

ともかくも私はあなたのやうにこんな誓約にさう重きを置くものではないのです。そしてこれを女が同時に二人の男を愛することの善惡を判斷する上の必須條件とするものではないのです。若しかういふ場合、過去に於ける誓だとか、因襲道德とかを楯にして、自分の嫉妬の情の抑へがたさに女をせめる男があるならば、その男の心は氣の毒なものです、寧ろ恥つべきことでせう。只この場合道德的判斷を下し得るものは、女の行爲を內的に見て、そこに不純なものがあるかどうか、又はそれは眞に必然なことかどうかといふ點に於て丈だらうと思ひます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私はいはゞあなたの態度があまり外的で、戀する者の潑溂たる心理に立ち入つた理解と同情とを缺くのを非常に物足りなく感じます。かういふ實驗のない人の言説だといふやうなことを思はせられて空虚な感に堪えません。

矢張り私には、田村俊子氏の「炮烙の刑」を評しました時擧げた、そしてあなたがあそこでお引きになつたあの場合なら、十分でない迄も、ふたりの男を同時に愛してもいい場合として許してもたいして差支あるまいと思はれます。

長者に對して禮を缺くやうなことを申したことはどうぞお咎め下さいませんやうに。

（終）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

手紙

里見マツノ

野枝さま――

いつぞやは夜、突然おじやまにあがりまして飛んだ失禮いたしました、あの日私は午後の一時頃お伺ひ致すはづで御座いましたが、それに先き立つてＮＩが參りまして私の最始の考へを曲げてしまつたのです。つまりそれは「そんな服裝じや初對面の人に對して失禮だ」さいふのでした、私も全くさう心着きました。しかし私は着のみで一枚の着更へさいないのです、――「だから……こんな事があるから去年の暮に羽織だけでもこしらへたらどうださいつたじやないか」なんて自分の女に向つてゞもいふ樣な口調でぐづ〱言ひ出しました、そして「訪問は當分着物の出來るまで見合はして今日は手紙を出して置く方がよからう」との事でした。勿論それは都合のいゝ事かもしれません。しかし私はその手紙を滿足に書く事が出來るかどうかわからないので御座います、十有餘日の間私は親戚にも知巳にも又北海道にゐる父母にさへはがき一枚出す事が出來ませんでした。――ＮＩの爲めに私の生涯は汚されました。ＮＩの一言一行は私に強い打擊を與へました、私は絶えずお化にとり付かれて自分を發展せしめる事が出來ませんでした、藝術に對しての或超越した氣分などはとても持つ事が出來なくなつたのです。かくて尊い自己の魂は日一日とＮＩの爲めに食まれてゆきます……そして私はだん〱つまらない愚痴つぽい女になつてゆかなければならないのです――傷ついた私の魂はその痛みに堪えかねて悲鳴をあげます。その度にＮＩは顏を顰めてこういふのです「僕はそんな生意氣な事をいふ女は嫌いだ！　自己の發展……それは極めて狹い見地に立つた女のあわれむべき虛榮心に過ぎない。女には天職といふものがある、昔から今だに變らない女としてしなければならない事がある、それを置いては女の生命のあらうはづはない」……

私は女さしての務めを忘れたのではありません。しかし、この世の中に個々に生れて來た吾々人間は互に人と異なつた自己――個人さして與へられた特種な自己を發展させなければならないのではありますまいか。勿論女としてはしなければならない事はあります、しかも、そのために女は自己を發展させてはならないといふ事があませうか。女は子女を產まなければなりません、それと同じ樣に女も特種な自己を見出して出來得る限り發展させなければならないのではありますまいか、つまり前者と後者は只靈と肉との違いに他ならないのではありますまいか。自己の發展を止めるさいふ事は女にとつては恰

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

度分娩を止める様なものではありますまいか。私は當然産まなければならないものは産まして戴きたい。しかし私はその爲に人に迷惑をかけはしない。そして又私は自分といふものを侵されない限り人の營みに對して干渉をしない。そして私は世の中に生きてゆきたいと思ふ。

生てゆくといふ事は靈と肉との發展でありますまいか。——女はすべて合理的に出來あがつてゐるものだと男は思つてゐるらしい、しかし女は……人間は……同性に於ても、之から合理的なものであらうか。むしろ不合理な所が個人として興味ある事ではありませんか。今の世に善良といはれてゐる女は、合理的な女である、少なくてもその分子の多い女である、しかも彼女は或一面から見る時は全く僞善者に外ならない、彼女は合理的ならんがために自分を僞るといふ事に汲々としてゐる、そして自ら良妻賢母なりと自惚れてゐるのである。彼女の焦點は自分の特性を消滅せしむる事であつた。彼女の見地はあまりに狹くあまりに單純であつたのである。

もう私はそれ等の人々に對して詳しい事は申しますまい。しかし只一ツ、私は、それ等の人々のいふ樣に自己を發展せしめる爲めに、女の務めを忘れたり、おろそかにしたりするのでないといふ事と云つておきませう。

——隨分話しが橫道に外れてしまいました、おゆるし下さいませ……で私は、自分といふものに相手を侮つた樣な心地がないならば强いてその心を外に表はさなくつても、それは少しも禮を失つては居ないと思ひまして、私は、あゝした失禮なりで、しかも夜、お伺ひ致しましたわけです。

お目にかゝつて意外に感じた事は、お歳のお若いといふ事ではなくつて——それは、いろ〳〵あなたがお書きになつたもので豫想する事が出來たから——非常に懷しさと親しみをもつた、そしてあの……愛らしいお方であつた事でございました。そして初對面の人に對してはよくある自分といふものをぎり〳〵繩目にかけられてゐる樣な苦しみなどは、みじんも持つ事は出來ませんでした、そして私はあなたに對して或崇高な觀念を持ちました。

私は冷たい夜風に吹かれてあの寂しい路道を停留所までお送りして戴いた時——あなたは私より稍々小柄の樣に思はれましたが——私は、この自分の心のすむ限り感謝の意を表したかつた、失禮でございますが、何んだかあなたとわたくしとは、お互によれ〳〵になつて育つてゆく葛草の樣な心持がいたしました、そして、すべての枝葉を棄てた先蹟としての太い幹の交りがして戴きたいと希ひました。私はあなたの前に、自分といふものゝ袋の底をたゝいて見たかつた、何んだかそんな氣分がいたしましたのです、で後になつて思ひ出して見ると隨分恐

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かしい事や失禮な事があつたのに氣がつきます、そしていくじなくも私はあなたや、あなたのおうちの方々のお心の中に或憎惡の念を蒔いた來たのではないかしらと怪むのでございます。

電車は込んでゐませんでした、私は靜かに心の目を開く事が出來た時——あなたのおつしやつた或事が再び蘇みかへつて來た時　かつて未感した事のない不思議な強い〳〵力、心の底から湧き出づるのを覺えました、——自己といふものが筆太に顯はれるのを見ました。

私は誰が何んといつても——この私の肉を犬に食はれる樣な死に方をしても、これまで育てあげた或ものをすてまい！……自己の影を薄めまい——そして私を理解してくれない人々に對して因襲に囚はれた——世の中の教育家のする樣な、つまらない皮相な妥協はすまいと決心しました。

私は自分といふものゝ線が太く深くなつたといふ事を限りなく喜ぶと共に、繊弱であつた私のこの心の中にそうした力をお入れ下さいましたあなた樣に深く深く感謝いたします。

あまりの心安さにまかせて隨分つまらない事を長々と書きつづけました。何とぞあしからず。

又近日中にぜひおじやまに上りたいと存じます。

では今日はこれで……、皆樣によろしく。

編輯室より

□此度こそは少しどうにかと思ひ〳〵次號へ次號へと逐はれて一向思つた半分も出來ません。出來もしないことを發表したつて馬鹿氣てゐますから默つてゐます。併しそのうちにもつとしつかりしたものを書きたいと思つてゐます。

□今月號に私はゾラの「生の悅び」を讀んだその感想をかなり長く書く氣でゐましたけれど急にまとまりませんのであんなもので間に合はせました。此度は——三月號には發表しやうと思つてゐます。

□私が卷頭の感想を書きましたときにはまだ安田さんの原稿を見ないときでした。そして私は安田さんから、また鄕ちやんからいろ〳〵な話を伺ひ、そしてまたあの安田さんの原稿をよんで私はつまらないことを書いたと思ひました。私は生田さんがお氣の毒でたまらなくなりました。けれどもその爲めにあの原稿を引つ込めると云ふこともあんまり生田さんを馬鹿にするやうで惡いからそれは止めましたけれども私は生田さんがどうぞあの感想を平靜な心でおよみ下さることを望みます。

□生田さんは青鞜に對抗するやうな雜誌を近いうちにお初めになるさうです。もつと青鞜よりも實際的なそし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て青鞜のやうに高慢でなく賣れないのでないずつといゝ雜誌をお出しになるさうです。實世間により多く觸れて多大の經驗をお待ちになつた氏の立派な技倆をはやく見たいものだと思ひます。はやく實現されんことを希つてゐます。

□生田さんはあの問題をもつて大分方々を歩いてゐらつしやるやうですがどう云ふつもりなのかしらと首をかたむけてゐる人があります。誰も皆生田さんに同情することは事實ですがその爲めに生田さんのあの論文が價値づけらると云ふことはなささうです。私はさう云ふ生田さんの惑亂した姿をまともにはとても見てゐられないやうな氣がします。悶へ悶へてだん／＼自分を窮地に引ずり込んで行くと云ふ悲しい事實が生田さんにはおわかりにならないのかと悲しくなります。

□らいてう氏は六月に小石川區西原町一ノ四に轉居なされました。

□安田皐月氏は原田潤氏と結婚なさいました。

□今月は六號の感想を長く書く氣でしたが二三日來ひどく頭が混亂してゐて何にも書けません、來月こそはきつと澤山かきます。此度はこれで失禮します。何だか一向氣のりがしない編輯ぶりをお許し下さい。（野枝）

□障子社同人の展覽會が近い內に催されます。眞田久吉氏、淸水大助氏、奧村博氏、植原桑喜代氏等の繪畫が出品される筈です。

□家庭の醫學と云ふ雜誌が駒込林町家庭の醫學社から出ました。家庭の衞生に供へる我國での最初の會が起されたのです。何處の家庭でもいつてい丶會だと思ひます、委しくは同社宛におきゝ下さいまし。

寄贈書籍

最新結婚學　青柳有美著　實業世界社發行
實驗無痛安產法　同　編　同
新唱歌集「新年」　葛原幽著　朝野書店發行
同「銀世界」　同　著　同
門「門松」　同　著　同
同「太陽」　同　著　同
ニイチエ超人の哲學　ゲオルグ、ブランデス著　生田長江譯　天弦堂發行
毒藥を飲む女　岩野泡鳴著　鈴木三重吉編

寄贈雜誌

中央公論、層雲、みづゑ、生活と藝術、創造、假面、詩歌、六合雜誌、婦人の友、婦女新聞、早稻田文學、帝國文學、心の花、第三帝國、反響、三田文學、アララギ、微光、三光、家庭の醫學、平民新聞、潮、東洋哲學、新小說。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■每月一回一日發行
■定價一册金貳拾五錢（郵稅壹錢五厘）
■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
■廣告料（一頁）特三十五圓、一等二十五圓、二等十五圓、三等十圓、（半頁）七圓
■振替貯金口座は（東京二一一一六青鞜社）へ拂込まれたし。
■郵券代用は一錢切手に限る（但し一割增のこと）。
■編輯事務、圖書雜誌、補助團會費拂込、廣告申込、交換廣告は靑鞜社へ。
■雜誌購讀に關する一切の事務は靑鞜社へ。
■原稿〆切期日は每月十日限とす。

大正四年一月廿五日印刷納本
大正年二月一日發行

禁轉載

東京市小石川區竹早町八十二番地
靑鞜社內
編輯兼發行人 伊藤野枝
東京市神田區西小川町二丁目六番地
印刷人 篠田玉三
東京市神田區西小川町二丁目六番地
印刷所 大精社

發行所 東京市小石川區竹早町八十二 靑鞜社 振替東京二一一一八番

發賣所 神田表神保町三番地 東京堂 電話本局四五六一番 振替東京二七〇番

青鞜

昭和44年9月30日発行　【第6回配本】

青鞜第5巻　2月号

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
v.5
no.2

University of Colorado at Bo[redacted]
[redacted]8304 6746490

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER